俺日!季節の特別短編集！！

ポンジュニア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
俺日！季節の特別短編集！！

【Ｎコード】
Ｎ７４２９Ｚ

【作者名】
ポンジュニア

【あらすじ】
現在執筆中の小説【俺の日常非日常】のキャラ達の、季節にそったお話。言うなれば短編集。
本編とは関係無しの、オリジナルの話です。
俺の日常非日常を読んだこと無い方でも、多分楽しめるはず。
季節にそって書きあげた特別ストーリーをお楽しみください！！

俺日！クリスマス特別編！（前編）～クリスマスイブの夜に～（前書き）

クリスマス特別編です！
前後編となっております。

俺日！クリスマス特別編！（前編）～クリスマスイブの夜に～

やあ、俺だ。山空（やまぞら）　海（かい）だ。

突然だが、今の俺の現在地は、自宅のリビングのソファの上。
毛布に包（くる）まりながら、尋常じゃない寒さに震えているのだ。

現在は午前7時。立派な朝だ。

だが、いつもの朝とはわけが違う。そう、特別な朝。

休日の朝だ。……という事ももちろんあるが、今日はそれだけじゃない。

そう、なんと……今日はクリスマスの前日。
つまり、クリスマスイブの朝なのだ。

今夜がクリスマスイブ。

……え？お前らの世界は八月じゃなかったのかだって？

ふふふ。大人になりなさい。
これは本編とは無関係の話だ。いわゆる特別編。

季節がごろごろ変わるのはよくある話なのだ。わかったな？

まぁ、そんなわけだ。

俺日！クリスマス特別編！！（前編）
～クリスマスイブの夜に～

こんなに寒いのに、外はまさかの日本晴れ。
雪が降るどころか、雲ひとつないこの状況。

せっかくのクリスマスなんだから、雪の一つや二つふってくれればいいものを……。
じゃないとこの寒さに苦しめられている今の俺が報われん！！

って、そんな事はどうでもいい。

「うぅ……寒いな」

そう、寒い。
俺の家には暖炉はもちろんストーブもなく、暖まる為の家電製品といえば、暖房、こたつ、そしてホットカーペット。

この三つだ。

だが、暖房は空気が悪くなる。だから俺はあまり使わないのだ。
つまり、残りはこたつとホットカーペット。

ホットカーペットはすでに使っている。
まぁ、ソファに座ってたら意味ないのだが……電源を入れたばかりで、まだただのカーペットなんだよ！！

そして、こたつ。
これも現在使用中。

……ああ。分かっている。お前らの言いたい事はすべて分かっているのだ。
矛盾してるよな？　そうなんだよ。そうなんだよ！！

「寒い？　カイは何を言ってるんヨか？全然寒くないんヨ」

ブチッ。流石の俺も、頭の中の何かが切れた。

「そうだよ山空。どのへんが寒いんだい？」

ブチィッ。そのうち血が噴き出してくるかもしれん。

そう、こたつは……。

「白々しいんだよお前ら！！人んちのこたつ占領（せんりょう）するんじゃねぇよ！！」

こたつは居候二人が占領してるのだ。

「なら山空も潜ればいいじゃないか」

「ざけんな！！そもそも潜るもんじゃねぇよ！！！」

そうなのだ。
肩まで入るぐらいなら、俺のこたつは余裕で平気。大きいからな。

でもな。
雪で作ったかまくらの如く、こたつの中に住み着いているとしたら話は別だ。

この俺に入る余地なし。

「何だよ山空。なら僕達はどうすればいいんだ？」

オメガがこたつの中から聞いてくる。

つまり、『俺には声しか聞こえないぜちっくしょー』状態だ。

「……あのさ。こたつから出ろとは言わねぇよ。せめて潜るのをやめろ。顔を出せ」

俺はオメガ達に優しく語りかける。

俺ってば優しいな。

だが、オメガは……

「ほれ」

そう言って、少しこたつから何かが出てきた。……って

「誰がメガネだけを出せと言ったぁ！！！顔を出せよ！！生首の如く！！！」

見事にこたつの外に放り投げられたオメガの黒ぶち眼鏡。

メガネのレンズを光らせながら、コロコロと……いや、カツンコツンと、床を跳ねながら俺の足元までやってきた。

……メガネよりもこたつ。

どうしよう。寒さのあまり、頭がおかしくなってしまったのかもし

れない。
まさかこの俺が、メガネに同情する日が来るとはな。
「生首の如くって……表現が怖いんヨ……まったく」
こたつの中から、可愛らしい声が。
「うるさい！そんなことより、顔ぐらい出せよ！！」
俺はやはり、寒過ぎていかれていたのだろう。
もうコタツに入ることより、こたつから顔を出させることに全力を注いでいたのだから。
「まったく、これでいいんヨか！！」
ちょ、なんか凄いキレ始めたよコイツ。
しかもこたつから出てきたものは……まぁ、一言でいえば顔だった。
「……確かに顔だけどな。だれが紙に描いた顔を出せと言ったんだよぉぉ！！！」
そう、十秒で誰でも書けるような簡単な顔。
せめてもっと頑張って描けただろんじゃないのかよ？
眉、眉、目、目、鼻、口で直線６本で出来上がりとか。絵描き歌にすらならんぞ。
棒が６本ありました～♪チョンチョンチョンチョンチョンチョ～ン♪で終わっちまう。

「これだからわがまま将軍は」

メガネを捨てたオメガが呟いている。
もうオメガじゃねぇよコイツ。

メガネないからオタクだよ。で、変態のロリコンだよ。

「つか、なんだよその将軍。なんでも将軍にすれば解決！って考え方やめろよ」

わがまま将軍。
多分、相当わがままなのだろう。だって将軍になっちゃったくらいなのだから。

「そんな変な考え持ってないじょえ」

おい語尾。
その語尾どうツッコめばええねん。

……つーかさぁ、もういいわ。
こうなったら、俺の華麗なる口説きテクで自分からこたつを出るように仕向けてくれる！

と、意気込んで告げるはクリスマス。

「クリスマス！！」

「おい山空。急にどうしたんだじょえ？」

ちょ、だからその飲み物みたいな語尾やめろ。

「で？　クリスマスがどうしたんヨかまったく……」

そして小娘。気付いてないと思ってるのか？
お前の中で『まったく』がマイブームなのかよ。正直ウザいぞ。

「いいかエメリィーヌ」

「ウチはイカじゃないんヨ……まったく」

「うるせぇよ！！つーかイカなんて言ってねぇ！！」

「山空どうした？　流行りの威張りん坊将軍じょえ？」

おまえらうぜぇ！！
威張りん坊将軍って何だよ！！暴れん坊将軍の親せきか何かかよ！！

はぁ、はぁ……いったん落ち着こう。ふぅ。

俺は落ち着きを取り戻し、静かに話し始めた。

「いいか？」

「だからイカじゃ『言わせねーよ！？』

落ち着き2秒で崩壊。

もうやだ……俺には手に負えないよ……。

「最近流行りの手に負えないしょうぐ『だから言わせねぇつってんだろ！！』

寒いことなどすっかり忘れ、その場で立ち上がると同時に毛布をこたつに叩きつける俺。

もうこうなったら、すべてを無視して話を続けてやる。

俺は若干…てかかなりメンドイので、無視しようと意気込んだのだった。

「よく聞け二人とも！実は今日、俺はある計画を企てていたのだ！！」

なるべくカッコよさげに告げた。

「ある計画？それはなんだじょえ」

「それはな、二日にわたるクリスマスパーティだ！！」

そう、実は、これを計画したのは秋。

なんか、なんとなく思いついたらしい。

秋達の両親も、許可してくれているらしいしね。

集合は午後７：００となっとります。なんとなく。

もちろん俺の家で。

まぁ、そんな所だ。

だから俺は、秋が持ち出した企画を、さも俺が提案しました風に二人に話しているのだ。

「……山空。意味がわくぁからんじょうぇ」

……どこぞのなまりだよあんた。

「まぁ、簡単に説明するとだな……」

俺は二人に趣旨を説明した。

要は、いつものメンバーで二日間盛り上がろうみたいな？

ちなみに、ユキは家族と過ごすからパスだってさ。やったね。

もちろん、一泊二日だ。

「こ、こ、こここ、ここここ、こと」

突如オメガに異変。

「おい、落ち着け」

「こ、琴音ちゃんも来るのか！？」

若干興奮状態のオメガ。

一応、来る予定だけど……。

……来るかなぁー？

もしかしたら変態が嫌で来ないかもしれないな。うん。
でも、基本的に盛り上がる事って、琴音大好きだからな。もしかしたら来るかも。
いや、でもやっぱり来ないかも。うーん。んー？　うーん。
……つまり。
「お前が必要以上に琴音に構わなければ来るんじゃね？」
「ヤッホォォォ！！！」
とても上機嫌ですな。
こたつの中から、オメガの喜びの叫び声が響く。
幸せな奴だな。
「カイ、クリスマスパーティってどんな事するんヨか？」
こたつの中から聞いてくるエメリィーヌ。
「えーと、みんなで集まって、遊んだり、騒いだりとかかな」
「ゲームしたりテレビ見たりなんヨか？」
「そうそう」
「一緒に盛り上がったり？」

「そうそう」

「ご飯食べたり？」

「そうだよ」

それだけを告げると、急に無言になり始めるエメリィーヌ
そして数秒が経過し……

「どんなご飯なんヨか……？」

「そりゃ、パーティだからな。いつもよりは豪華にする予定だけど」

「……皆も食べるんヨね？」

「そうだけど？」

「……ウチの食べる分が少なくなってしまうんヨ」

おい。
飯かよ。
みんなより飯かよ。
遊びより飯の事かよ。

「安心しろ。なんたってパーティだからな。食べきれないほど買ってきてやるさ！！」

「やったーーーなんヨーーー！！！」

喜びすぎだぞあんた。

どんだけ食いしん坊やねん。……まぁ、こたつの中にいるからどのくらい喜んでるのか分からんが。

「とりあえずそんな訳だから、今から準備するぞ」

俺はこたつの中に引きこもり隊の二人に告げた。

「なんヨ！」

「うむ」

俺の言葉に元気良く返事を返してくれた二人。でもこたつから出てこないのはなぜ？

こたつの事を思い出し、さっきまで気にしてなかった寒さにより体が震えた。

このままじゃ風邪引きそうだ。

「お、おい。そろそろこたつから出てこいよ」

俺の声が震えている。

やばいなこれは。

俺が言うと、こたつがもぞもぞし始めた。

どうやら出て来てくれるようだ。

よかった。これで凍死せずに済む。

……しばらくすると、こたつの中から何かが出てきた。

おいなぜだ。

なんで俺が呟いたのかと言うと、出てきたのは一枚の紙。そこに書かれた『断る』の文字が目についた。

こいつら……。

「ふざけんじゃねぇぇ！！！」

――――――まぁ、そんなわけで、ほぼ無理やりこたつから引きずり出しました。

オメガはこたつの足に張り付きながらすすり泣き、エメリィーヌはそうでもないようだった。

オメガキモい。

そのあとはいろいろと準備をしました。

部屋を飾り付け、豪華料理（特売の唐揚げ）を大量に買い、あと適当にパーティに見えるものをかごに放り込んだ。

最初は嫌々だった二人（小娘と変態）も、今は一緒に手伝ってくれ……るはずもなく。

こたつから出た二人は嫌々どころの騒ぎではなかった。

自室に引きこもり始め、なんか知らんが軽いボイコット状態。

まぁ、自室と言っても、結局は俺の部屋になる訳だが。
そんなこんなで、ほぼ一人で準備をした今日この頃。
すっかり時間は過ぎ、気がつけばもう午後６時３０分を過ぎていた。
もうそろそろみんなが到着する時間だ。
え？展開早すぎで、適当すぎる？
大人になりなさい。特別編だからこれでいいのだ。
そして、すっかりおしゃれに飾り付けられた我が家のリビング。
すっかりこたつで暖まっているオメガとエメリィーヌ。
エメリィーヌは、クリスマスツリーの飾り付けの時のみ動いただけ。
まぁ、そんな事はどうでもいい。
俺はこういうイベント行事は大切にしたいのだ。
ほら、誕生日とか夏祭りとかさ。
他にも色々あるが、すべて盛り上げるのがこの俺。ただバカ騒ぎがしたいだけかもしれない。
でもそれでいいのだ。楽しければいいのだ。
バカみたいに騒いでないと、俺はただ疲れるだけだからな。
ストレスの発散も兼ねて、これでいいのだ。問題無いのだ。

ほら、元祖天才バ〇ボンに出て来るパパも言っていたじゃないか。
これでいいのだ。と。

つまりはそういうわけだ。

と、ちょうどその時だった。

「うわぁー、凄いねー！」

突然、俺の背後からここにいるはずのない少女の声が聞こえる。

つ・ま・り。

「琴音ぇ！不法侵入は犯罪だぞゴラァ！！」

後ろを振りむけば、そこには、『冬だよ！もう誰が何と言おうと冬なんだよ！！』といったような、まさしく冬の格好をした琴音が立っていた。

手袋、マフラー、ニット帽。

耳あてはしてないらしく、耳と鼻。そして頬は真っ赤だ。

手には多少大きめな荷物。

そしてかすかに、帽子に白い何かが付着している。

「あれ？　外、雪降ってんの？」

わずかに付着したそれは、『雪だよ！もう誰が何と言おうと雪なんだよ！！』な感じだった。

俺の問いに、琴音が答える。

「うん。だから歩いてきたんだよ。自転車じゃ危ないし」

外はもう真っ暗だ。

そんな夜に、琴音が歩いてきた。

オメガやオメガ部類の人間がいたならば、高確率で誘拐しているだろう。

「おい、俺もいるんだぞ」

琴音の背後霊のようにうっすらと立ちつくしていたある一人の男が、頼んでもないのに突如喋り出した。

「ちょ、背後霊じゃねーから！！実在してるから！！」

まさかのトレーナーの上にパーカーという、斬新かつ新鮮なファッションをした一人の男。

だがしかし、意外なことにとても似合っているから困る。

そんな男の名は、竹田さん。

「ちょ、おい！竹田さんはやめてくれよ！！」

「え？　お前竹田さんだろ？」

「そうだけど！そうじゃないだろ！！」

……しょうがねぇな。

竹ちゃんがゴチャゴチャうるさいし……。

それに、この小説を読むのは初めての方…つまり、初見の方々のためにも、かるく紹介でもしておいてあげよう。

では改めまして、まず『まさしく冬！』の格好をしたこの少女が、皆さんおなじみ竹田（たけだ）　琴音（ことね）。

とても元気な中学一年生。最近怖いよこの子。暴力的なんだよ。恐ろしや。

そしてこの存在感ない人が、琴音の兄貴にして絶賛影薄いキャラが定着中の竹田（以下略。

「ちょちょちょちょ、ちょっと待てい！！」

何だよ。

「なんか不都合でもあったか？」

「不都合あったよ！！てか、不都合しかねーよ！！」

なんだと？　不都合だらけですと？

「それは悪かったな。不都合だけしかねぇならさっさと帰りなさい」

「違う！！」

「違うならそれでいいだろ」

「い、いや、違うけど違わないんだよ！俺の名前が名前じゃない事に不都合であって、お前のもてなしに不都合が見つかったわけではないから、結果的に不都合ではないけども、お前の俺の扱いに不都合が感じられて、つまりは不都合だったわけで……あ、あれ？」

なんか良く分からない事をよく分からない感じに呟いている、亡霊のように影が薄いこの男……あ、それじゃあ亡霊に失礼か。

まぁ、とにかく。この男、理解不能なり。

「つ、つまりはだな！！その、あれだよ！ほら、そのそういう事だよ！！」

「どういう事だよ。情緒不安定かあんた」

「ちげーよ！！」

「じゃあ、精神不安定かあんた」

「ちげーって！！」

「ならば、言語不安定か？」

「意味分からねーよ！！」

「ったく、だったらお前はなんの不安定なんだよ！！」
「なんでお前は俺を不安定にさせたいんだよ！！」
「わりぃ！　ちょっとなに言ってるか分かんねぇや！」
「何で分かんねーんだよぉぉぉ！！！！！」
とうとう噴火した。秋が噴火した。
そう、この男の名は、竹田（たけだ）　秋（しゅう）。琴音の兄貴。ただそれだけ。
そんな秋の頭の上にかすかに残った雪が、秋の存在感のようにうっすらと消えていった。
「海兄ぃ、あまり秋兄ぃをからかうと壊れちゃうから」
琴音が静かに告げた。
「壊れたら新しいの買うから平気だよ」
「俺はお前らのおもちゃじゃねぇぇ！！」
「……たく、安心しろ。冗談だよ」
これ以上からかうと本気でぶっ壊れそうなので、とりあえずなだめておく。
「そうだね。竹田兄はおもちゃではなく、僕達の道具だからね」

「道具でもねぇぇ！！！」
突然オメガも参加。
そして秋をからかい続ける。
「そうか。竹田兄は道具じゃなく下僕だね」
「下僕でもねぇぇ！！」
「なら奴隷ですな」
「奴隷でもねぇぇ！！」
おい。そろそろやめたげて。
ちょっと可哀そうになってきたぞ。
だがやめないオメガ。
「なら、竹田兄はパシリで決定！！」
「なぜじゃぁぁ！！！！」
そろそろ秋がいかれる。
琴音もそう思ったのだろう。少しムスッとした表情で、オメガに言った。
「恭兄ぃ！そろそろやめなよ！！」
「琴音ちゃんの頼みでも、さすがにそれは聞けな『やめないと私だ

け帰るよ！？』

「ごめんなさい」

「分かればよしっ！」

琴音の言葉を聞き、その場ですぐに土下座して謝ったオメガ。どんだけだよ。

しかし、琴音も琴音だ。

まさか力技ではなく、自らを武器に使ってくるとは。恐るべし女なり。

琴音って意外と、将来付き合ったりとかしたら、さんざん遊ぶだけ遊んで、あとは捨てるみたいな人になるかも。

貢がせてポイッ。みたいな？

……やはり恐ろしい女なり。

「ちょ、海兄ぃ、今なんか失礼なこと考えてたでしょ」

「かかか、考えてないなり！」

「動揺しすぎだよ海兄ぃ……」

また考えていたことが暴露されていたらしく、俺は驚いて語尾がおかしくなってしまった。

俺はいつもそうだ。

無意識のうちに考え事を自ら暴露している。
そして、さらに最悪なのが、喋らないように意識していると、今度は表情に表れてしまう事だ。
つまり、俺の考えは、世間様にフルタイムオープン状態。
まるで無料で入れる博物館のように、いつでもどこでも思考公開しているのだ。
これを逃れるには、この俺が感情を持たない植物人間と化すしかない。
それか、みんなに耳栓＆ａｍｐ；アイマスクを常時装備してもらうとか。
表情で分からないようにセロハンテープを顔中にべたべた貼りつけて、バカみたいなツラを民衆の前にさらけ出すしかない。
もちろん、そんなこと出来るはずもなく。
つまり、諦めるしかないのだ。そうなのだ。これでいいのだ。
とあるパパさんも言っていた。これでいいのだ。と。
そんな考え事をしていた俺に、琴音はめっちゃ呆れ顔だ。やめて。
「……そんな所で話してないで、こたつに入ったらどうなんヨか……？」
そしてエメリィーヌも、呆れた声で俺たち三人に言った。
ずれた俺たちの話の流れを断ち切り、まともな方向へと持って行っ

てくれるのがエメリィーヌだ。

あ、ちなみに、エメリィーヌは宇宙人らしい。
見た目はとても美少女だけどな。中身はただの生意気な小娘だ。以上。エメリィーヌの紹介終了。

……言い忘れていたが、エメリィーヌもまた冬仕様。

地味な灰色のトレーナーを着て、薄緑色の若干もこもこしたズボンをはいている。暖かそうだ。
こんな地味な服装でも、オメガの手にかかればこんなにも可愛く着こなせるのだ。
まぁ、エメリィーヌだからこそだとは思うが。

そして、なぜか白いマフラーを頭に巻いている。
仕事疲れの、酔っぱらったサラリーマンが頭にネクタイを巻くかの如く。

聞く所によれば、本人　曰(いわ)く、強くなった気がするらしい。
子供の感性……いや、宇宙人の考えるこたぁ分からん。理解に苦しむ。

そしてこの変態。もといオメガの紹介に入ろう。

オメガは、俺が付けたあだ名。カッコよく言えばニックネームだ。
外見はとてもイケメンで、俗にいう美少年そのものだが。
綺麗な薔薇にはとげがあるというように、イケメンの姿は仮の姿。
本当の姿は別にある。
このイケメンの容姿に騙されて、何人こいつの犠牲になったか分か

らないほど！！
コイツは全少女たちの敵なのだ！！

と、なんかゲームの魔王っぽい説明になってしまったが、それもしょうがないこと。
……え？　魔王の説明っぽくなってないって？　うるせぇな。細かいこと気にするなよ。

で、続けると。
なぜなら奴は……超ド変態だからだ！！

そう、ロリコンで変態でメガネでオタクで銀髪で……あ、オメガの由来はオタクメガネからきている。
そんなオメガは、俺や秋と同じ高校二年だ。

少女達を見るとバカみたいにアホになり、バカみたいな事をアホみたいにやる。それがオメガ。
先ほどの流れで分かったと思うが、琴音もオメガの標的となっている。

そんなオメガの服装は、中央付近の大きくて赤いハートマークの中に、白字で『ＬＯＶＥ』と刺繍（ししゅう）されたピンク色のトレーナーを着ている。
一緒に街を歩きたくない格好ナンバー１のような格好だが、不思議と違和感もなく、とても似合っているのだから困る。

多分、この服を考案したデザイナーさんでも、ここまで綺麗に着こなしてくれるつわものが現れることなど、頭の片隅にもなかったであろう。

これが変態の底力だ。

……え？　俺の格好？

安心しろ。ただの革ジャンだ。気にするな。

「エメリィちゃん。隣座るよ？」

「別にいいんヨ」

「琴音ちゃん！駆け落ちしない？」

「する訳ないでしょ。崖から落ちろ」

そんな会話には、すっかり慣れてしまった俺達。

琴音も慣れちゃってるッポイし。慣れって怖い。

俺はみんなの前に、昼ごろ大量に買った豪華料理（特売の唐揚げ）や、その他もろもろを出す。

それを見たエメリィーヌが一言。

「うぉー！なんじゃこりゃー！」

大変興奮気味のご様子。子供は無邪気で可愛いものだ。

そして、琴音も一言。

「海兄ぃ、お皿に盛りつけて出すとか考えなかったの……？」

うん。素直でよろしい。

そうなのだ。実は、よくスーパーなどで見かけるあれ。
白のプラスチックのトレーに、特売のシールがでかく貼られているのだ。

そりゃ、雰囲気もくそもあったもんじゃないわな。俺が悪かった。

琴音に言われて初めて気付き、俺は大きめの平たい皿を持ってきた。

そして、豪快にすべての唐揚げをぶちまける。そう、皿の場外へ。
別にワザとではない。ほら、あれだよ。些細なミス。

「ちょ、海！お前バカか！！何やってるんだよ！このバカ！」

秋が驚いて俺に罵声を浴びせる。素直でよろしい。

さらに、一つの皿に盛り過ぎたらしく、てっぺん付近の空揚げがこれまた見事にごろごろと場外へ。

こうして、約１０個の唐揚げが地面に散らばった状態となった。……えへっ！ミスった☆

「……って、そんなくだらない事している場合じゃねぇ！！」

俺は自分で自分にツッコミを入れるとほぼ同時に、豪快に『３秒ルール！！』と叫びながら、皿の上の唐揚げらにハブられた唐揚げ達を素早く拾い上げる。安心しろ。箸でやっている。

皿を台所へ取りに行き、その皿片手に落ちた唐揚げ達を一つずつ箸で救出する。

焦っていたためか、何個ほどか取るのに苦戦したが、何とか終了。
救出の終わった唐揚げ達をテーブルに並べて、この俺の『３０秒間の３秒ルール』は幕を閉じた。
「ふぅー。あぶねぇ！セーフ」
俺がそう呟くと、さすがは竹田兄妹。二人仲良くツッコミを入れてきやがった。
「アウトだよっ！！！！」
「アウトだろっ！！！！！」
声で分かる通り、上が琴音で下が秋。二人仲良くハモりやがったわけだ。
「何だよお前ら。どのへんがアウトなんだよ！」
俺は逆切れをかます。
そんな俺の言葉に、最初に言い返してきたのは琴音だった。
「全部だよ！もう全部アウトだよ！せめて洗って来てよ！」
「いや、それはダメだろ。泡だらけになる」
「なんで洗剤で洗うことになったの！？普通水でしょ！？水ですぐでしょ！？」
「いや、それはダメだ」

「なんでよ！？」

「だってよ。そんなことしたら、すすいだ瞬間、唐揚げの衣がキュキュッと落ちちまう」

「そんなもん加減しなよ！！」

……とてもあらぶる琴音。

正直、こんな琴音を見るのは初めて……ではないな。うん

「おい海。お前ふざけるのやめろよ。早くなんか食わせろよ」

食欲にまみれた琴音の兄貴。

そして、食し始めた緑の小娘。

「おいエメリィーヌ。今回はフライング禁止だ。先に食うんじゃない」

「ちっ、ばれたんヨか」

バレバレだ。

両の手に握りしめられた唐揚げでバレバレだ。

「海、早く洗ってこいよ。そして食わせろー！」

秋は本気で空腹のようだ。しょうがない。早めに準備するか。

……そして。

「竹田兄の…モグモグッ…言うとおりだよ…ゴクン。山空…モグッ」

「おいそこのハゲメガネ。お前何堂々と食ってんだよ」
しかもメチャクチャ分かりやすかったぞ。
モグモグッゴクン。とか。隠す気ねぇだろ。
「山空…モグモグ……僕はメガネだが…モグ……ハゲてはいない…ゴクンッ。のだよ！」
「のだよ！じゃねぇよ。ちょっとぐらい待てよ。すぐ用意するよ」
「……なら早く用意しなさい。あと3個食べたらやめるから」
まだ食う気かよ。空気の秋が泣いちゃうぞ。
「誰が空気だよ！！」
「お前だよ」
「俺かよ！！」
「そうだよ」
「そうかよ！！」
もうツッコミの意味が分からん。
———とりあえずそんなわけで、俺達の豪華な夕食は終わったわけだ。

夕食が終わり、みんなはそれぞれにくつろぎ始める。
秋は相変わらずエメリィーヌと遊んでるし、オメガも相変わらず琴音にべったりだ。いや、実際にはべったりではなく、ボッコボコだが。
琴音も琴音で、結構楽しそうだし。
そしてなんとなくみんな忘れていると思うが、今日、琴音達は俺の家に泊るのだ。
ちゃんと、荷物も持って来たみたいだしね。
……果たして、無事に眠りにつく事は出来るのか。（特に琴音が）。
そして、無事クリスマスを迎える事が出来るのか。今日はほら、クリスマスイブだから。
さらにいえば、夕飯の豪華な材料や、エメリィーヌのクリスマスプレゼントを買ったせいで、俺の財布は悲しいことに。
……違う。俺が買ったんじゃない。サンタさんが買ったのだ。
そう、サンタさん。絶対にサンタさんなのだ。良い子のみんな！サンタさんだからな！！
その時だった。
「カイ、ところでクリスマスってなんなんヨか？」

……え？

「今何と？」

「だから、クリスマスってなんなんヨかって……」

えええええぇぇぇぇぇぇぇ！？

あれだけ盛り上がっておいてそれは無いだろ！？

……そんなわけで、エメリィーヌの衝撃発言が、午後８時２７分４９秒頃。この俺に降りかかってきた。

そう、クリスマスイブの夜に――――

クリスマス特別編！（前編）　終

俺日！クリスマス特別編！（前編）～クリスマスイブの夜に～（後書き）

後半へ続きます！！

俺日！クリスマス特別編！（後編）～メリークリスマス！！～（前書き）

皆さん！！メリークリスマス！！

俺日！クリスマス特別編！（後編）～メリークリスマス！！～

「クリスマスってなんなんヨか？」

クリスマスイブの夜。
それも、さんざんパーティやらをした後のことだった。

まぁ、前編を読んでくれた方ならもうお分かりだろう。
だから説明は省く！！……訳にもいかないので、前回のあらすじをかいつまんで説明しよう。

まず、竹田兄妹とエメリィーヌ、そしてオメガ。
そして俺を合わせた五人で、クリスマスパーティをしたわけだ。
そんでもって、地味に初となる竹田兄妹の宿泊。もちろん、俺の家に。

……本編を見てくれている方なら誰だか分かると思うが、白河（しらかわ）雪（ゆき）。
通称、ユキと呼ばれる、高一の奴がいるんだよ。もちろん女性だ。
そいつは家族と過ごすがために今回は不参加だ。

まぁ、そんなわけで、楽しい豪華夕食が終わった俺たちは、特にやる事もなくいつものようにグダっていたわけなんだが……なんと。

そう、朝から今までずっと一緒にいたと言うのに。
一緒にパーティだとか言って騒いでいたのに。

エメリィーヌという小娘が、クリスマスを知らなかったという衝撃の事実が発覚したわけだ。
それが、イブの夜。それも、約、午後８時３０分頃のことだった。

俺日！クリスマス特別編！！（後編）
～メリークリスマス！！～

「だから、クリスマスってなんなんヨかって……」
あどけない顔した少女の口から、驚きの言葉が飛び出した。
まぁ、しょうがないので、この俺様が、見事に説明してしんぜよう。
俺はカッコいい顔つきを頭の中で何パターンか作り出し、その中で教える時にしていると一番カッコ良さそうな顔つきをチョイス。
俺がチョイスした顔つきは、目元はキリッと。眉もキリッと。口もキリッと。
とにかくそこらじゅうキリッとさせ、クールな教師的な設定の顔を作り出した。
その顔を表に出し、いざ説明へ！
「エメリィちゃん。クリスマスっていうのはね……」
「お前が教えて差し上げるのかい！！」

突然の琴音の割り込みに、クールな教師顔でツッコミを入れてしまった。

つまり、変な顔してツッコミを入れる人になってしまったわけだ。

……アホらし。

「２４日。つまり今日だね。その夜中に、年中同じ服着たファッションセンスのかけらもないおじさんが……」

おい。

「トナカイを調教して、こき使ってソリを引かせ……」

おいおい。

「白いひげを生やしているが、実は付けひげで……」

おいおいおい。

「カギ穴を無理矢理こじ開け、家に侵入して寝ている子供たちの枕元に立ち、怪しい微笑みと共に見降ろしてきて……」

おいおいおいおい。

「手に持った薄汚れた袋の中から、ラッピングされたプレゼントを、なぜかみんなの望んでいる物をピタリと当てておいていくんだよ！！」

ちょ、琴音。お前……琴音……。

「なんなんヨかその怪しい人物は！大体、姿を見せず、その子供たちの欲しい物だけを置いていくなんて……悪徳業者みたいなやつなんヨ！！」

馬鹿野郎。サンタをなめんな。
あのおじさんをなめるんじゃねぇよ。

サンタクロースはな。
みんなのお父さんなんだよ。

お父さんが、一年間汗水たらして頑張って仕事して、苦労してためたお金で、可愛い息子、娘たちに優しく微笑みかけながら枕元にそっと置いてるんだよ。

なのにあのサンタときたら。

その場にいないどころか、存在すらしないただのメタボジジイのくせに……
感謝されるのはお父さんではなく、不摂生でメタボってるただの白ひげジジイのお前なんだぞくそサンタめ。

お父さんたちの気持ち考えたことあんのかよ。

かの有名な赤い帽子をかぶり姫様を救出に向かうあの鼻でかのマ〇オのように絶大な人気物になりやがって。

なんなんだよ。
赤いのがそんなにいいのかよ。

赤いからなんだってんだよ。ザケんじゃねぇぞ。

全国のお父さん。
今がチャンスだ。一緒にたたみかけようぜ。

こんな悪行の限りを尽くしたサンタなんかに、俺たちの苦労の末の幸せが取られてもいいのか？　そう、良いわけがない。

……え！？　子供たちの喜ぶ顔が見れるなら、このままでもいいだって！？
くそっ、泣かせるじゃねぇか。

流石はお父さん。
通った修羅場の数が違うってわけか。

くっ、俺には到底……かないそうもねぇや。

「おい海。お前大丈夫か？　休んでた方が良いぞ？　俺たちの事は気にするなよ」

本気で心配そうな顔をしている秋。

……なぁ、秋。お前は優し奴だな。
だがな。その優しさが、一番辛い時ってあるんだぜ。今がその時だぁぁ！！！

「変な心配してんじゃねぇよ！！俺はまともだっ！！！！ぶっ飛ばすぞお前！！」

「はぁ！？海こそなんだよ！！ボーっと突っ立ってたから俺は！！」

「海兄ぃ。秋兄ぃ。ちょっとうるさいよ」

「……」

「……」

あれ、なんでだろう。

別に琴音怒ってないよな。

何で言う事を聞いてしまったんだよ俺。

別に琴音はうるさいから静かにして。ってお願いしただけだぞ？

なのになんで、黙ってしまったんだ？

「海……。お前もとうとうその症状があらわれてしまったのか……」

秋がポツリとつぶやく。

「どういう意味だよ？」

「琴音といるとな？　なぜか逆らえないんだよ。多分体が恐怖してるんだろうな。俺達を守るために、俺たちの体が逆らってるんだと思う」

「……深いな」

そうか。俺は今、自分に守られていたのか。

ありがとよ。俺の体。これからもよろしくな。俺の体。

……あ、そうだ。

「琴音！お前、風呂入るだろ？」

俺はある事に気付き、琴音に聞いた。
けしてやましい気持ちで聞いたわけではない。

「え？　あ、その……うん」

少しだけ赤くなったが、どうやら入るらしい。
何度も言うが、けしてやましい気持ちがあって聞いたわけではない。

「……琴音、ちょっと一緒に風呂場についてこい」

何度でも言おう。けしてやましい気持ちで言っている訳ではない。

「なんだよ海。お前何考えてんだよ？」

やましい事は考えていないのは確かだ。

「あ、そうだ、エメリィーヌも一緒に来てくれ」

「なんなんヨか？」

「海兄ぃ、……もしかして変態だった……あぁ！変態！！そういう意味か！！」

琴音も言いかけて気付いたっぽい。

そう、変態なのだ。
い、いや違う。俺が変態なわけではない。
変態と言う単語に意味があるのだ。
そう、もう察しの良い皆さんならお気づきのことだろう。
後編に入ってから、変態。そう、オメガが一言も喋っていないのだ！！
てか、さっきから姿が見えない。これはもう、あれしかないだろう。
「なるほどな。盗撮か」
秋も気付いたらしい。
そうなのだ。防水小型カメラなんか設置された日には、大変な事になるのは目に見えている。
……つーか女の子に、それも中一の女の子が変態で連想するのがオメガってどうよ。
よほど変態の印象が強いんだろうな。普通変態でしょっちゅう一緒にいる人を思い出すってなかなか無いぞ。
ある意味凄いなあいつ。
「まぁ、そんなわけだから、浴室行くぞ！！」

「うん！」

「任せろなんヨ！！」

――――――――まぁそんなわけでだな。浴室についてみたものの。

カメラどころかオメガの姿もない。

でも油断はできないって事で、こっそりとエメリィーヌにオメガの思考を読んでもらったわけだ。もちろん、久々登場だが超能力で。

すると、オメガは琴音の寝る予定の部屋にいる事が判明。

ついでに、浴室に巧妙に隠された隠しカメラ、計８台を取り除くことが完了した。

つーか、もうあちこちにカメラがある。

廊下にトイレにリビングに。二階に階段にすべての部屋に。

結構時間かかったが、すべてを取り除くことが完了。

浴室のも合わせて計４７台。盗撮のプロかオメガは。

そして、エメリィーヌは超能力を長時間使い過ぎた為に、ソファでぶっ倒れている。

よく頑張ったな。エメリィーヌ。変態の思考を読ませてすまなかった。

――――気付けば時計は９時半を回っていた。

俺はすぐさまオメガを捕獲し、ロープで縛ってこたつの中へ拉致監禁。

俺と秋でオメガを見張っている間に、琴音とエメリィーヌは無事入浴完了。

エメリィーヌは、１０分程度でよくなったんだよ。

まぁ、そんなわけで。

俺たちも順番に終わらせ（琴音に言われたので、俺と秋はシャワーだ）、オメガは縛ったまま浴槽へと放り投げてくれた。

だがオメガは琴音ちゃんが入った残り湯だー！と、クリスマスなのにも拘らず変態な発言をして喜んでいた。

だが、琴音もそうなる事は分かっていたらしく、自分はシャワーで済ませ、まさかの入浴剤だけ入れて、いかにも『私が入った残り湯だよ！』を演出。だがもちろん、当の本人は風呂には浸からなかったという偉業を成し遂げた。

でもオメガはそんな事など知らず、愉快に喜んでいた。

風呂の湯を飲み始めようとした時はさすがに引いたが、琴音の一撃で溺死体のようになったので良しとしよう。

で、その上から見事に浴槽にふたをした琴音は、浴室の灯りを消し、就寝に至った。

流石のオメガも死ぬんじゃないかとか心配になったが、心配になっただけで、俺も寝る事にした。

ちなみに、琴音とエメリィーヌは同じベットで寝た。つまり俺の部屋だな。

で、秋もなんか怖いからという理由で、俺の部屋で寝た。

俺は寝る所がなくなったので、仕方なくリビングのソファへ。

結果を告げると、オメガは変態だったという事。

そして、無駄に入浴剤を使われたことに俺は軽くへこんでいた。

しばらくしたのち、エメリィーヌの枕元にプレゼントを放り投げ、眠りについた。

『なんか凄い手を抜いた感がぬぐえないが、きっちり書いているとクリスマスの特別編なのに現実世界でクリスマスが終わってしまうので仕方がない』と作者が呟いていた。

んで、次の日。つまりクリスマス。

前編はクリスマスイブの話だったから、

後編は、クリスマスの話をお楽しみいただこう。

では、始まり始まり。……気にせず行こうぜ。

――――――――――――――――――朝。

カーテンの隙間から、朝日が差し込んできた。

その朝日によって、俺は目が覚めた……方が、なんか神秘的で良かったのにね。

現実は残酷だ。

まず起きて第一の感想を述べると、尋常じゃなく寒い。

その寒さによって、俺は勢いよく飛び起きた。……が。柔らかいなにかが顔に覆いかぶさる。

そして第二に、目の前が真っ赤だ。

正確には赤い何かが俺の視界をうばっている。

赤く、柔らかくて毛糸のような肌触り。

かすかに温かく、呼吸と共に小さく揺れている。

……呼吸！？

俺が理解する前に、『ボコッ』という効果音と共に俺の顔面に激し痛みが。

そしてソファにいたはずの俺は、気付けば床に転がっていた。

そして、顔面。特に鼻に、熱くて鈍い痛みがじわじわと。

なにが起きたのか理解できず、俺はただ鼻を押さえながら起き上る。
すると目の前には……可愛いサンタ。
「いいい、いきなりなにするんですかうーみん先輩！！」
聞き覚えのある声。
そして何より、特徴的な俺のあだ名。
そう、うーみんとかふざけた名前で呼ぶのはあいつしかいない。
「ユキ！？　お前なんでここに……てかなんで俺がこんな目に！！」
皆さんも分かっているとは思うが、俺は多分殴られた。
そして、俺を殴ったやつが、このユキという女だ。
「先輩が悪いんです！！ユキはただ寒そうな先輩を見て布団をかけてあげようと思っただけですのに……その、ほら、なんでもありませんです！！」
顔を真っ赤に染め、そっぽ向いてしまったユキ。
そうやらユキは、寒さで震えていた俺に毛布をかけようとしてくれてたらしいな。
そこで俺が勢いよく起き上がってしまったがために……。ユキの……その…控えめな……うん。

俺は気付いた。
そりゃ殴られて当然だわ。うん。
「あ、その！あれは事故で！！えと、……そのごめん！！！」
多分、俺は顔が真っ赤になっていると思う。
だけど仕方がないだろ。俺は事故だ。
「わ、分かってますです！！ユキもその……いきなりで驚いちゃって殴ったりしてすみませんでしたです」
「お、おう」
とりあえず、クリスマスの朝は刺激的なる朝だった。
……え？　よく意味が分からないって？
そんなこと言わないでくれよ……俺にだってその、表現の限界というものがあるのだ。
つまり、その、ほら。
ユキの…そのほら、あれだよ。その……控えめな胸元に顔がだな……って、なんだこれ！！
もう良いだろ！！どんなバツゲームやねん！！
もう勝手に理解してくれよ！！恥ずかしすぎて死ぬわ！！
……ごほんっ。今のは忘れてくれ。

つまり、高校入ってから、今年の夏まで琴音以外の女子と会話した事が無かった俺にとって、まぁ、あれだ。
女子というモノに免疫があまり無くってだな。
先ほどのように、通常ならハーレムたる出来事も、今の俺にはただ恥ずいだけなのだ。
純情系男子だ。
って、俺の事はどうでもいい！
そう、気になる事がある。
「ユキ……なんでサンタの格好してるんだよ」
そう、サンタの格好だ。
誰が見ようとサンタ。
ひげは付けてないけどな。ひげ以外はサンタ。うん。
ついでに言っておくと、不法侵入している事にはもうノータッチで行くから。
「ほぇ？　だってクリスマスじゃないですか。それに可愛いですよ？　この衣装」
そう言うとユキは、サンタの格好を俺に見せつけるように、ゆっくりとその場で回って見せた。
あ、でんぐり返しとか、前転とかじゃねぇよ？

ちなみに、長そで長ズボンなので寒くはなさそう。
そしてさらに今気付いたんだが。
「ユキ、お前髪型どうした？　イメチェン？」
いつもは後ろで二つに結っているが、今はそんな事もなく。
俗に言うストレートロングみたいな感じになってる。
髪型一つで、雰囲気って結構変わるものだ。
「あ、学校の時以外は、基本結ってませんです」
「え？　でもこの前の休日は……」
「偶然です」
「あ、そうなんだ」
どうやら、そういうことらしい。
ちなみに、今7時ちょっと前。
「ふふふ。どうですか？　新しいユキはどうですか？　惚れ直しちゃったりしましたですか！？」
顔がニヤけてますよユキさん。
「確かに可愛いケドだな」

「本当ですか！？」

「でも惚れ直しちゃったりしない」

「うぅ……ショックです」

がくーんと、落ち込みましたアピールをしている。

なぜがっかりするんだ。やめてくれ。

そしてこれを読んでる読者様にいい事を教えてあげよう。……むっちゃ寒いやん。

そんなわけで、とりあえずこたつに入った俺とユキ。

流石に二人きりじゃ話が盛り上がらんな。

そんなわけで、俺はユキに疑問をぶつけてみる。

まず第一。

「家族と過ごすんじゃなかったのか？」

ユキは家族と過ごすからパスだと言っていたのにも拘らず、今現在ここにいる謎。これを解明しよう。

「そうですが……色々あって先輩に会いたくなったので来ました！！」

どうやら、色々あったらしい。
これ以上追及するのはよそう。

そして第二。

「お前……なにしに来たの？」

「だからうーみん先輩に会いたくて……正直、こっちの方が楽しそうな気がして」

本音は俺たちといた方が楽しいからだとさ。
……ユキの家庭って複雑なの？

まぁ、これ以上追求するのはよそう。

……また暇になったな。

と、その時だった。

「ほわぁ！！な、なんですかあの人！？」

ユキが突然大声をあげる。つーか、ほわぁって驚く奴初めて見たわ。

ユキの指差した方向を見てみると……。

「うへぇ！？　誰だお前！！！」

人間は驚くと変な声が出るらしいな。

って、それよりもこいつ誰！？

そう、俺とユキが見たものは。

全身ズブ濡れで、縄で縛られていて、メガネで銀髪で。

だがおかしいのはその顔だ。皮膚が、まるで硫酸をかけられたかの如く溶けだし、剥がれ落ちようとしている。つまり、顔面ぐっちゃぐちゃ。

ぐちゃぐちゃ度でいえば、プリンをフォークで潰しまくった時のプリンのようにぐっちゃぐちゃだ。

「や、山空……」

そんなモンスターが、俺の名を呟いた。

つーか、オメガだよな？

声はオメガだ。でも顔はぐっちゃぐちゃだ。

その時、二階から足音が。

どうやら、誰か起きてきたようだ。

そして、リビングへと入ってきた。

「海兄ぃ、なに大声出してるの……？」

琴音である。

寝起きゆえ、寝癖で髪が跳ねている。
いつも結っている髪も、今は結ってはいない。……まぁ、琴音は見なれてるから、ユキの時のような不思議な違和感はない。
そして、オメガの顔を琴音が見た。
「……」
琴音は、まだ寝ぼけているのか、しばらくモンスターと化した恭平の顔をじっくり眺めている。
つーか本当に何があったんだ。大丈夫かよオメガ。
俺の心配をよそに、オメガを見つめ続ける琴音。
それから、しばらく……。
「……うわぁ！？恭兄ぃ、なんでそんなズブ濡れ！？」
おい。もっとおかしい所があるだろうが。
顔にご注目しろよ。
絶対に顔だろ。あのイケフェイスがぐっちゃぐちゃのドッロドロなんだぞ。
その時だった。
なんの足音もなく、なんの気配も感じられなかったのに。
ある一人の存在感が薄い奴が。
「どうしたんだよ……って、恭平！？なんでまだ縛られてるんだよお前」

秋も見事に顔はスルーだ。

「うわぁあぁ！？」

そんな秋に驚く琴音。

なんでオメガの時より驚いてんだよ。

つーかお前ら！！ずぶ濡れより縄より、もっと目立つ所があるだろ！！

顔だよ顔！！

お前ら何だよ！！

そしてまた、二階から足音が。エメリィーヌが来た。

「カイ、なに騒いでるんヨか？」

とても寝起きが良いエメリィーヌ。

その手にはきちんと、俺が夜中に置いたプレゼントを握りしめている。

あれ？　もうちょっと驚いたりとかしてくれてもよくね？

こちとら、反応だけが楽しみで……反応！

そうそう、エメリィーヌ！！お前、この間抜け兄妹にちゃんとした反応を見せてやってくれ！！

行け！お前ならオメガの顔に気付くはずだ！！

俺は必死でエメリィーヌを応援した。そして。

「……あ、キョウヘイなんヨか。おはようなんヨ！」

「おはようエメル」

まさかのあいさつ。

朝の挨拶がキチッと出来て、誠によろしいのだがね。

残念ながら、今は違う反応が欲しかったわけよ。

つーか、オメガもその顔で爽やかに朝の挨拶かわしてんじゃねぇよ。

「せ、せせ、先輩！　眼鏡先輩！！　どど、どうしたんですかその顔！？」

俺の隣で、ユキが俺の待ち望んでいたツッコミを入れた。

待望のツッコミだった。

俺はこれを待った。

正直、俺の目がおかしいのかと疑いかけていた所だった。

ありがとうユキ。俺はお前のそのツッコミを、しばらく忘れないだろう。

「あ、ほんとだ……恭兄ぃどうしたの」

「俺も気付かなかったわ。恭平どうした？」

「どうしたんヨか？」

ユキの言葉で、やっとみんなが気付いたようだった。
お前らの視野狭すぎだろ。

みんなに心配され、やっとオメガが話し始める。

「この顔は……」

オメガの言葉の雰囲気に、その場が一気に静かになる。

そして、みんなが息をのむ。

その状況の中、オメガが呟いた。

「一日中泳いでたらふやけた」

ほぅ。なるほど。わからん。

「ふ、ふやけたぁ！？なにバカなこと言ってるんだよ！！そんなわけねーだろ！！」

秋がツッコむ。
そう、オメガの顔は、もうリアルでやばい。

直視できないほどのあり様だ。

顔に蟻でも這わせてみろ。一瞬にして砂場に見えるぜ、きっと。

「恭兄ぃ、もしかして寝ないでずっとお風呂の中にいたの……？」

琴音が、恐る恐る尋ねた。

「そうだよ！琴音ちゃんの残り湯を堪能していたのさ！！」

まだ騙されてるよコイツ。

「あ、はは。恭兄ぃ、よかったね……」

「うん！」

さすがの琴音も、種明かしするのが可哀そうになったのだろう。

メチャクチャ苦笑いだけどな。

「うーみん先輩、眼鏡先輩大丈夫なんですか……？」

ユキが小声で聞いてきた。

確かに、あの顔絶対におかしい。心配だよな。

「いえ、そうでなくてですね……変な人すぎません？」

「あ、そっちね。大丈夫大丈夫。あいつはいつも変だから」

「……ユキはあの人ちょっと苦手です……怖いし」

ユキはちょっと怯えているようだった。

確かに怖いな。変態だものな。

「キョウヘイ。顔が取れかかってるんヨが……」

エメリィーヌがやっとまともな質問へ。

そうだ。早くこの問題を解決せねば。

こんな変態の顔面ごときで、小説の文字数を増やしてはいられん。

ちゃっちゃと行くぞ。ちゃっちゃと。

ツッコミ所があっても、すべてを無視してすすめるからな。文句は受け付けん。

「あ、これか。これは大丈夫。なんたってマスクだからね！！」

ツッコミ所その1。なぜかマスク。

「なんだ。マスクだったんだ。なら早く取りなよ」

「うん分かったよ琴音ちゃん。……ぐっ、うっ、うおぉぉぉ！！！！！！シャキーン」

ツッコミ所その2。謎の雄たけび。

ツッコミ所その3。謎の効果音。

「あ、マスクが取れて元の恭平に戻ったんヨ」

ツッコミ所その4。縄で縛られていて両手が使用不可のはずなのにマスク取れちゃった。

「あ、見られてしまった。琴音ちゃん。僕の素顔を見てしまった人

には、生涯責任を取らせよと言われているのだ。結婚しようよ」

「お断りっ！！」

「グホォッ」

ツッコミ所その5。謎設定。

ツッコミ所その6。琴音怖い。

ほっとく所その1。秋空気。

「こ、琴音ちゃん。いつも以上に、激しいじゃないか……ガクッ」

「うーみん先輩。何ボーっとしてるんですか？」

俺の方をユキが揺らしてきた。

おぉ、終わったか。

ツッコミ所カウンター機能停止。よし。

「おいみんな！外を見よ！！」

俺は勢いよくリビングのカーテンを開く。

するとそこには、庭一面に降り積もった雪。

まさしくホワイトクリスマスだ！！！

ホワクリだ！！ホワクリホワクリ！！ん？　フォアグラ？　って、

なに考えてんだよ俺。

「おー！！すげー積もってんじゃんか！！」

やっと秋が喋りはじめた。

お前の感想など聞きたくない。

琴音やエメリィーヌ。ユキなど、女子の感想を求めているのだ。小説的に。

「ま、真っ白や！待ち歩く少女たちのし『恭兄ぃ。うるさいよ』

「琴音ちゃん！悔しかったら止めてみグフォ！！」

容赦なく神の鉄槌をくだす琴音。

オメガもオメガだ。よくやるよ……ホント。

つーか、お前らいいコンビだな。

そんな事より雪だ。

こんなにも積もる事なんて珍しいからな。

琴音やエメリィーヌも大興奮間違いなしだろう！と、思ってたのが約3秒前の俺。

だが現実は甘くなかった。

「うぅ、どーりで寒いと思ったよ。こたつこたつ」

……琴音ェ・・・

「ウチも寒いのは嫌いなんヨ……こたつこたつ」

……エメリィーヌ……。

くそ、たるんどる！！

最近のわけぇもんは根性というものを知らん！！

よって、この江戸改革の新生児と呼ばれたこの俺直々に指導しちゃる！！！

「江戸改革って……お前今いくつだよ」

「ふっ、見た目どおりさ……」

「あっそ……」

なんだよ秋。その目はいったい何だよ。

いいだろ。俺だって何か名称が欲しかったんだよ。

ほら、秋だって色々あるじゃん。

生ける屍とか、落ち武者ゴロ太とかさ。

「ねーよ！！そんな嫌な名称ねーよ！！てか、ゴロ太って別人やん！！」

「はぁ！？なに言ってるんだよお前。ゴロ太なめんじゃねぇぞ！？」

そう、ゴロ太は中肉中背で、うす味を好み、愛と勇気と正義を置いてきた奴らが健康を貫くために戦うＲＰＧ。

「ゲームかよ！！しかもありそうで嫌だなおい！！」

いや、そんなゲームないだろ。どないなゲームやねん。

「秋先輩！！雪ですよ雪！！秋先輩を突き落としてもいいですか！？」

「よかねーよ！！なにがどうなって俺が突き飛ばされなきゃならんのだよ！！」

「突き飛ばすんじゃないですよ。突き落とすんです」

「大差ねーべ！？」

「え、大佐命令？　なに言ってるんですか？」

「なんで聞き間違えた！！何がどうなって大佐命令になった！！てか大佐ってだれさ！？」

「大佐は大佐ですよ。もしや秋先輩って、テストの点数悪い人ですね？」

「大佐なんてテストで出てこねーよ！！」

「なに言ってるの秋兄ぃ。ペトラ大佐はテストに出て来るでしょ？」

「え？　そんな大佐いたか？」

「いる訳ないでしょ」

「いねーのかよ！！唐突に変な嘘つくなよ！！」

秋とユキと琴音がミニコントっぽい事してる。

クリスマスなのにね。なんだろう、このへんな感じは。

なんで雪がこんなに積もってるのに遊ばないんだろう。

雪で遊ぼうぜ？

みんなでさ。雪で遊ぼうぜよ。

雪玉とか持ってあそぼうぜ？　平和にさ。

「みんなでユキを弄(もてあそ)ぶんヨか？」

「それ誰かが言うと思ったわ。つーか、その言い方やめろ」

意味を間違えれば卑猥なことになる。聞く人によっちゃあらぬ誤解が生まれそうだ。

「そういえば、エメリィーヌ。お前雪は初めてか？」

「ん？ユキなんよか？」

「違う。外の雪」

何回同じネタをやらせるんだよ。

「それは当然にして偶然。出来過ぎた奇跡という言葉。だが奇跡は起きるものではない。起こす物なのだヨ」

「無駄にカッコよく言ってんじゃねぇよ」

とにかく、雪初体験ならば遊び方もしらんだろう。色々遊び方ってもんがあるんだよ。

これで、エメリィーヌをホワイトの中に包み込んでやるぜ！！

って、それじゃ生き埋めじゃねぇか。

まぁ、なんとなく気合が伝わればよしとしよう。

「じゃあみんな！外で遊ぶぞ！！おぉぉ！！！」

俺は元気よく皆に告げた。

「カイ、その前にクリスマスケーキを食べるんヨ」

……エメリィーヌめ。なぜクリスマスは知らんくせにそんな事は知っているんだよ。

「あ、ごめん。私が寝る前に教えちゃった！」

確信犯は琴音か。……まぁ、しょうがない。食ってからにするか。

「じゃあ、食ってから外で遊ぶぞー！」

「そうですね！うーみん先輩、ユキが超特大サイズを作ってあげますからね！」

「お、雪だるまか？　いいよなぁ、特大の雪だるま」

「違います。雪うさぎです」

うさぎかよ。

「カイー！早くするんヨー！！」

「分かったよ。そこで待ってろ」

俺は台所に秘伝の特大クリスマスケーキを、みんなの前に出した。

「あれ？　これ海兄ぃが作ったの？」

琴音が一目見て俺の手作りだと見抜いた。

「なんでわかったんだ？」

自分で言うのもあれだが、今回は店にも引けを取らないデコレーションっぷりのはず。

ちょっとやそっとじゃ、分からないと思うのだが……

「……箱。ケーキの入ってた箱」

琴音が呆れながら、俺の持っているケーキの箱を指差した。

あ、そうか。
作ったわいいけど、ケーキの入れ物が無く、仕方ないから小型の段ボール箱に……。
「しかも、ケーキのチョコのやつ、なにがあったんだよ？」
秋が言った。
「い、いやー、実は途中で分かんなくなっちゃってさ。下手な鉄砲も数打ちゃ当たるってやつ？」
「……いや、だからってこれは無いだろ。さすがに」
「先輩……適当すぎません？」
ちょ、分かってるよ。
みんなしてそんな目で見るなよ。
『W←ミス　Ｍｅｒｒｙ　Ｘマス』チョコにはそう書かれている。
「海、『Ｍｅｒｒｙ　Ｃｈｒｉｓｔｍａｓ』だからな。そのくらい覚えとけよな」
「うるせぇな。ちょっとド忘れしただけだっての！！」
俺をバカ扱いしやがって。
時間が無かったんだししょうがないんだよ。
「じゃあ何で最初に『W』書いたんだよ。しかもミスったんなら上

から塗りつぶせよ」

「うるせぇな。チョコが逆さまだったんだよ！！」

「なんだそりゃ」

これは本当の事だ。

苦し紛れの言い訳ではない。

「それにしてもひどいですね。琴音っちもそう思いません？」

ユキがさっきから無言の琴音に話をふった。

「え！？　あ、あ、ああそうだね。でも、海兄ぃだって頑張って作ったんだし！！そんなことどうでもいいと思うよ！！」

「……まぁ、そうですね。琴音っちの言うとおりです。早く食べましょうです！」

「あ、ああ。そうだな。海！悪いんだけど、ケーキ切ってくれないか？」

「わ、わかった。今切るからまっとけ」

こうして、俺はケーキをみんなに分けた。

ちなみに、オメガはずぶ濡れだったので着替えてきていたらしい。

どうりで途中から姿が見えないと思ったんだ。

なので、オメガも参加して、俺たちは朝っぱらからケーキだ。
普段なら高いから絶対に買わない、瓶のカルピースを注ぎ、みんなこたつを囲むように座った。
チョコはエメリィーヌにあげようと思ったのだが、エメリィーヌが琴音にプレゼントしたのを俺は見逃さなかった。
「おい琴音。気にすんな。明日があるさ」
ずっと暗い琴音を、一応俺が元気づけておく。
そうだ。明日があるのだ。
たかが英語が分からないくらいで落ち込んでるんじゃないぞ琴音！！
「海兄ぃ！別に、落ち込んでないから平気だよ！海兄ぃのやつのどこが間違ってるのかが分からなかったくらいで落ち込んでなんか……ないよ」
うそこけ。
「そりゃ、ちょっとぐらいはおかしいと思ったけどさ……、秋兄ぃが分かるのに私が分からない訳ないしさ……はぁ」
すっかりがっくしムードだ。
くそ、しょうがない。
元気づけるしかないな。
でもどうしようか。

俺が悩んでいると、さすがは兄貴。やりおる。

「なぁ琴音、気にすんなよ。まだいいじゃねぇか。英語『だけ』苦手なんだから。俺なんか、ほとんど苦手だぞ！！さらにいえば、海なんかいつも赤点ギリギリだぞー！！」

ちょ、なに勝手に俺の学力ばらしてくれてんねん。

「うん！わかったよ。もう平気！！その前にケーキが食べたくなった！！」

どうやら元気を取り戻したらしい。よかったよかった。

「じゃあ、みんな行くぞ！」

俺の合図と共に、みんながジュース入りのコップを持つ。

そして。

『メリークリスマス！！』

そう言いながら、コップを上にあげ、みんなで叫んだのだった――

――――――そのあとはみんなでケーキを食べ、外で遊び、楽しく過ごした訳だ。

てか、外で遊ぶ所も書けよ。雪で遊ぶ所も書けよ。手を抜くな作者。

……まぁ、綺麗の終われたので良しとする。

それじゃーみんな！メリークリスマス！！！

そして作者から一言！！

『……これが終わったらもしや、元旦の話も書かなくちゃいけなくなるのか……？』

はい、締りの無いお言葉ありがとう。

じゃ改めて、メリークリスマス！！じゃね！！

クリスマス特別編！！　完

俺日！クリスマス特別編！（後編）～メリークリスマス！！～（後書き）

読んでくれた皆様。

ありがとう。

エメリィーヌのプレゼントの中身。恭平（オメガ）の縄の行方。

気にしないでください！！

それじゃみなさん！メリークリスマス！！

俺日！お正月特別編！！（前編）～明けましてオメガ暴走～（前書き）

お正月特別編です。
風邪引いていて投稿が遅れました。
前後編なので、後編は一月中には投稿したいと思います。

俺日！お正月特別編！！（前編）～明けましてオメガ暴走～

とうとうこの日がやってきた。

クリスマスのすぐあとにやってくるそれは、俺の金銭面において大きい打撃を与える。

そう、正月だ。

1月1日。通称：元旦。

もう元旦の旦の字がお茶にしか見えなくなってしまっているやつ。

こんなもの読んでないでPCの前からすぐに離れることをお勧めする。

携帯電話で見ている奴は、そんな事してないで電話しろ。

電話を携帯するから携帯電話なのだ。それじゃ、携帯ネットだ。即改名すべきだ。

って、俺は何を一人で呟いているんだ。

これが噂の正月ボケか。

……話を戻そう。

まず初見の方々のため、簡単な人物関係をお話しておかなくてはなるまい。

まずは俺、山空（やまぞら）海（かい）は、前まで一人暮らしだった、高校二年生だ。
両親は仕事の都合で二人とも海外。
で、一人暮らしだったってのは、前までは一人暮らしだったのだが、現在は違うということ。
そう、我が家に居候が約二名いる。
その居候二人と、俺の昔からの親友とその妹。あとは……変な奴が一人。
そして自分を含めた、計、６名が、この物語における主要人物たちだ。
そんなわけで、お正月なり。

俺日！お正月特別編！！（前編）
～明けましてオメガ暴走～

「うっ！……完全なる寝不足！！」
正月。
山空家の朝は早い。と、言いたいところだが。
現在時刻、朝の１１時。午前１１時だ。

昨夜、年替わりのカウントダウン見てたが為、いつもより遅い起床。

俺はゆっくりと身体を起こす。

「……はぁ」

体が重い。

若干クラクラする。

やっぱり夜更かしはするもんじゃねぇな。と、心からそう思った。

若干ダルいが、そろそろ起きないさすがにヤバい。

夜眠れなくなるし、今日は色々と予定もある。

って、俺はいつから規則正しい青年になったのだろうか。

昔は全然平気だったのだが……てか、今よりももっと酷かった。

平気で寝坊はするし、約束はすっぽかすし、朝食なんか食べたことなどなかった。

だが最近の俺ときたら。

目覚まし時計の音と共にキッチリ起床し、朝食も食べ、約束の時間もきっちり守る。

今はこれが普通の生活になっているが、前の俺からは考えられねぇよな。

慣れって怖い。

だから夜更かしや、昼頃まで寝るなんて久しぶりだ。

俺はゆっくりと自室からでて、一階へと降りる。

途中、洗面所により、蛇口を開け、寝ぼけた顔に冷たい刺激を送り込む。

いやぁー！スッキリだわ。

って、こんな優雅に優雅なひと時を実感している場合ではない。

今日は色々と忙しいんだった。

顔を洗った俺はリビングへ。

そこには、いつもの如く居候二人にこたつを占領されていた。

「あ、カイ遅いんヨ！出掛けるんじゃなかったんヨか！！早く準備するんヨ！！」

「わりぃわりぃ。でも、まだ出かける時間じゃないし、みんなだって集まってないだろ」

「そんなことどうでもいいんヨ！！」

こたつに入って横になり、漫画を読みながらポテトチップスを食いあさり、誰がどう見ても一番のんびりしてそうな奴が、この俺を急

かしたてる。こいつが居候その１。

軽く紹介しとくと、信じられないかもしれないが宇宙人なわけよ。

ある日突然現れて、勢いで居候始めたんだ。

まぁ宇宙人と言っても、普段はただの小生意気な小娘だがな。

ちなみに今日は、冒頭で紹介した親友、その妹、変人たちと一緒に騒ぐ予定。

初詣行ったり、正月らしい遊びで盛り上がったり、正月らしい料理を食い漁ったり。

クリスマスの時はこの居候小娘にプレゼント買って、夕食を豪華ディナーにして、金がほぼなくなったわけだが。

興奮冷め止まぬうちから正月になり、お年玉、豪華おせちなどで金を失う始末。

さらには、『俺ももうお年玉をあげる側になったのか……』と、心の傷の貯金ばかりがたまっていく。

それが今日。

だがしかし、そんな暗い気持も正午まで！！１２時過ぎるとともにブルーな気持ちをおさらばし、新たな年の幕開けを祝おうじゃないか。

だから１１時５９分５９秒９９まではブルーでいさせてください。

なぜなら、みんなが来るのは１２時だから。
待ち合わせはもちろん俺の家。

なんか流れるように勝手に決まった。俺はまだ了承してないのだが
……奴らが来ると言ったら絶対に来るので準備をしておくのだ。

「カイ！何ボーっとロボットになってるんヨか！」

一応言っておこう。
ロボットになっているつもりはない。

「なんだよエメリィーヌ。お前朝から機嫌が悪いな」

「もう昼になるんヨ！朝ご飯食べてなくて死にそうなんヨこっちは
！！」

凄い形相でキレるエメリィーヌ。

確かに、俺は朝は寝ていたので作ってない。
それは本当に悪いことをしたと、いつもならすぐに反省し謝る所だ。

だがな。
今日は違うぞ。

だって、テーブルの上には大量のみかんの皮とお菓子の袋、ちなみ
に食べかすがとても大量に散乱しているからだ。

もうそんなに食えば腹いっぱいになるだろうに。てかなれよ。

「カイ！！何してるんヨか全く！！」

なんだよ。

居候の分際で偉そうじゃねぇか。

「エメリィーヌお前、口が悪いぞ。仮にも女の子なんだからもうちょっとおしとやかになりなさい」

一応寝坊した俺も悪いので、エメリィーヌに優しく注意してみる。

俺って優しい兄貴になれると思う。

だがしかしエメリィーヌは。

「うるさいんヨ」

ムカッ。

「お前調子に乗ってんじゃねぇぞ。いい加減にやめねぇと家から追い出すぞこの居候！！」

「も、もしそうなってもシュウの所に行くからいいんヨ！！」

エメリィーヌの顔からは若干焦りが見て取れる。

強がりやがって！

「なら今すぐ出て……行ったら許さんぞ。外は危ないんだ」

つい言ってはいけない言葉を言いそうになり、俺はあと一歩のとこ

ろで踏みとどまる。
エメリィーヌはまだ道なんてよく知らないからな。
事故にでもあったらシャレにならん。
いやー、やっぱいい兄貴になるな、俺。
自分の心の広さを実感した瞬間だった。
「か、カイがそこまで言うならここにいてあげるんヨ」
俺はまだそんなに言ってない。
本当は出て行きたくないもんだから、すぐに賛成しやがって。
なんだかんだ言ってまだまだ子供だな。
「あ、そうだ山空。きみにちょっと頼みたい事があるのだが……」
「ん？　なんだ？」
さっきまでの俺とエメリィーヌの言い合いの中、ずっと無言でテレビを見ていた居候その2。
そいつが突然、キリッとした表情で何か俺に頼みたい事があるらしいことを言ってきた。
こいつが俺に頼みごと？　いったい何なんだ。
「混沌の夜に光射す時、緑色の小さな精霊に我の生命捧げたし。我空腹。何かを捧げたもれ」

「……はいはい」

腹が減ったことを無駄に高いクオリティで無駄にカッコよく告げたこいつは、居候その2。

本名：鳴沢（なるさわ）　恭平（きょうへい）。

俺と同じ高校に通う……てか、同じクラスの高校二年。

無駄なイケメン。美男子だが、そいつの本性は変態。

中学生までの女の子（少女）にはとても優しくするが、時折興奮しすぎて暴走する。

あとは四角い黒ぶち眼鏡で、少女と同じくらい二次元大好きのオタク。

思いっきり痛い奴だ。あとは……そうだな。銀髪だ。

あと発明が趣味で未来のネコ型ロボットもビックリの珍道具を持ち出したりする。

紹介終了。

あ、そうそう。言い忘れていたが。

オタクでメガネなことから、俺はこいつのことをオメガと呼んでいる。

「説明ごくろう！じゃあ、早速昼食をいただこうか」

……偉そうだなおい。

「まぁ、いいや。すぐ作るから待ってろよ」

「たまご焼きが食べたいんヨ！」

急にご機嫌なエメリィーヌ。

さっきまでイラついてたんじゃないのかよ。

「わかったわかった。すぐ作る」

「ありがとうなんヨ！！」

――まぁ、そんなわけで、まだ何も始まっていないというのに、こんなにここで時間を使っていいのだろうか。

これからいろいろあるのに。

てな訳で、約束の時間までダイジェストでどうぞ。

飯を作った。食った。そのあと準備した。約束のお時間。

ちなみにおせち料理ね。あれは皆が集まってから適当に食う、つもり。

まぁ、たんに忘れてただけだが。そんなところだ。

一応、みんなが集まったら、初詣に行く予定だ。

「カイー！見るんヨー！」

エメリィーヌの機嫌はすっかり良くなり、今じゃ無邪気な子供だ。

「……何ニヤニヤしてるんヨか、カイはアホなんよか？」

……無邪気な子供だ。

「アホとは失礼な。……てか、なんだ？」

「ほら、見るんヨ！どうなんヨか？」

今の格好を、嬉しそうに俺に見せつけて来る。

いやぁー、振袖って良いねぇー。

そう、エメリィーヌは薄緑色の振袖を着ているのだ。

俺は最初、振袖なんて今さら着るやついねぇよ。と思っていたが、オメガがそりゃもうしつこくて。

『このアンポンタン！正月は振袖！夏祭りは浴衣！！風呂上がりはバスタオル一枚（バスローブでも可）と、この現代社会において義務付けられているのだ！！』

と、熱く語られた。変態丸出しある。

てか、そんな変な義務があるわけ無かろうに。現代社会なめんなよ。

だがまぁ、結局は俺が折れてしまったわけなんだがね。

ちなみに、エメリィーヌの振袖はオメガが用意した。

なんでそんなもんがオメガのかばんから簡単に出て来るんだよ。

まぁ、そんなわけで、エメリィーヌは今、振袖姿だ。

「カイ！！聞いてるんヨか！？」

「あ、あぁ、ごめんごめん。なんだって？」

「だから、これどうなんヨかなって」

そう呟くと、振袖を再度俺に見せつけて来る。

反対しておいてあれなんだが……やっぱり振袖は最高だ。オメガナイス！

俺はオメガに心から感謝をした。

振袖なんて古臭いと思っていたが、そんな事はない。

女の子達が身に纏うにより、その人の可愛らしさたるものすべてが引き出されている。

それがたとえ、エメリィーヌでもだ。

あのエメリィーヌでさえ、とても可愛いと思わせてくれる振袖。

やっぱりいいよな。振袖ってのは。

「なんか怪しい雰囲気を察知したんヨ……」

おい。そんなに引くことないだろうが。

分かりやすいほど引いているエメリィーヌ。

『ピーンポーン』

突如、家のチャイムが鳴りだす。

いったい誰だよ。こんな時に。

「皆が来たんじゃないんヨか？」

エメリィーヌが言った。

皆が来た？

時計を見てみると、１２時１５分。

確かにみんなが来てもおかしい時間帯ではない。

でも、あいつらが。

あいつ等の誰かが。

「ご丁寧にインターホンを鳴らしてくれたことがあるかぁぁぁ！！！！」

そう、結構みんな俺の家に遊びに来るのだが。

たとえば１０回遊びに来たとして、その全１０回は勝手に上がりこんでくる始末だ。

不法侵入だ。

そんなやつらが、インターホンを鳴らしてわざわざ来た事を俺に報告するだと！？

あり得ない。
あり得る訳がない。
あり得てたまるかってんだ。

「山空。早く行ってあげたらどうだ？」

『ピーンポーン』

「ほらカイ、外で待たされてる身にもなってあげて欲しいんヨ」

わぁ、うるさいうるさい！！

こんなにしつこくインターホン鳴らしやがって！！

「まるで誰かが来たみたいじゃねぇか！！」

「誰かが来てるんヨ」

『ピーンポーン』

くそ、やめてくれ。

琴音たちなんだろ！？　みんな来たんだろ！？

だったらなぜそんなもの鳴らすんだよ！！

「それが普通だよ山空」

おかしい。おかしすぎる。

カギは開いているんだ。知り合いなら普通に上がって来るのが常識。

「山空。常識が狂っているぞ」

オメガが何か言ってるが気にならない。

もしかしたら、訪問販売とか、詐欺師とか。

借金取りかもしれない！！

「カイには取られる借金なんてないんヨが……」

その時だった。

『もう！何してるんですか先輩！！』

後方から声が聞こえ、振り返ってみると。

ガラス越しに、庭に立っている人物がいる。俺のよく知る顔が一人。

ユキだ。

エメリィーヌが窓に駆け寄り、カギを開ける。

すると、ユキが大変ご立腹の様子で上がりこんできた。

「先輩何してたんですか！5分も！！女の子を待たせるなんて最低ですよ！」

家に上がりこんでくるなり怒鳴り散らすユキ。

……うん。うんうん。うんうんうんうん。

「やっぱりお前はこうでなくちゃな！！よかったよかった！！」

「ほえ？」

この不法侵入っぷり。それでこそお前。

あんなインターホン鳴らすとか常識外れだ。

「せ、先輩……？」

ユキが困惑しているようである。

あ、紹介がまだだったな。

コイツは白河（しらかわ）　雪（ゆき）。15歳の高校一年生だ。ちなみに、俺と同じ高校。

俺のことをうーみんとかふざけたあだ名で呼びやがる。

なんというか、ちょと変わったやつだ。どうやら俺の事が好きらしい。以上。

「って、なに勝手に不法侵入してんだよ！！」
堂々と庭から入ってきやがって。
「おい山空。それは理不尽というものですぞ」
「もう意味分からないんヨね」
「えと、あの、一応インターホン鳴らしましたですが……」
「インターホンなんか鳴らすな！ビックリするだろ！！」
「うーみん先輩が壊れてますです」
なんだと。
俺は壊れていないぞ。
「壊れているのは世界だぁ！！……あ」
「山空が騒がしいから精神安定シール（改）をはらせてもらった！」
「だ、大丈夫なんヨか……？」
「本編にあったような後遺症は改良したので大丈夫！」
「なら良いんヨが……」
……なんだろう。
気持ちがすっきりとして、胃痛、胃もたれ、ムカつき、吐き気、などがすっかり良くなり……

「このシールにそんな効果は無いよ」

「胃薬まっしぐらじゃないですか」

さまざまな罵声がこの俺に浴びせられる。

そんな時、俺は気付いた。

「ん？　ユキお前、なんかお前らしくない格好してるな」

「地味にひどいですよそれ……もっとよく見てくださいです！」

こうしてユキは、先ほどまでのエメリィーヌの用にこの俺にその姿を見せつけて来る。

淡いオレンジ色に、ちょい唐草模様の振袖。

こんな振袖があっていいのか。てかあるんだな。

いつもとは違い、とても可愛らしく、なおかつとても似合っている。

性格美人という言葉があるが……コイツの場合その逆だな。外見美人だ。

性格は残念だけどな。

……今思ったんだが、ユキってモテるだろ。見た目だけならかなり可愛いからな。

「それがまったくなんですよねぇ。てか、先輩ひどいです」
どうやらまた口に出していたようだ。
そんな時だった。
『ピーンポーン』と、また恐怖のチャイム音が響く。
「もうウチが出て来るんヨ」
エメリィーヌがただ立ちつくす俺に呆れ、一人で玄関へと走っていく。
そして、数十秒後、静かな足音と共に琴音がやってきた。エメリィーヌと話をしながらだ。
「あ、海兄ぃ……って、なんで色合わせちゃったの。ダサい」
俺を見るなり、自慢のお気に入りの服をバカにしてきやがったコイツは、竹田（たけだ）　琴音（ことね）。
俺の親友の妹にして、中学一年生という若さを持つ。
俺にとっては可愛い妹のような存在だが、最近なんか怖い。
なにかあればすぐ脅してくるし、都合が悪いと力技で捩じ伏せて来る、ある意味極悪な闇の心を持つ。
その隠された心の闇を表すかのように、琴音の来ている振袖はちょい花柄の黒だ。

この腹黒め。あの頃の大人しい琴音はどこ行った。説明終了。
ちなみに俺の格好は、黒のトレーナーに黒のズボン。
さらにトレーナーには、みんなの愛する帝王ペンギン、通称：ペンペンのイラストが堂々とプリントされている。

「海兄ぃ、私の事そんな風に思ってたんだね…？」

げっ、キレてる。
また無意識に考え事を喋ってたってか。この癖早く治した方が身のためだな。

って、そんな場合では無い！！
琴音は強い。超強い。ガチの琴音が負けてる所を見た事がない。だから怖い。

「おい琴音。今日は我慢してやれ。めでたい日なんだから」

俺のことをかばってくれたのが、琴音の兄貴にして俺と同学年の竹田（たけだ）秋（しゅう）。
コイツはもう説明なんぞいらんだろう。地味なやつ。以上。

「わかってるよ。その程度で私が怒るわけないじゃん。ムカつくだけで」

やっぱり怒ってるじゃん。めっさ怒ってるじゃん。

「琴音っち！明けましておめでとうございます！です！！」

「あ、ユキちゃん！おめでとう！その振袖可愛いね」
ユキのおかげで、琴音の気が紛れ、俺への怒りはどこかへ吹っ飛んだようだ。
てかこうなると、ここにいる女子らはみんな振袖姿になるな……
振袖は時代遅れとか思ってたのって俺だけか？
ちなみに秋は、無地で灰色のフード付きトレーナーだ。地味だ。
「ありがとうです琴音っち！琴音っちも可愛いですよ！よく似合ってますです」
「ありがとユキちゃん」
二人は楽しそうにお互いを褒めあっている。
そこに、秋が近づいて言った。
「白河の振袖姿って綺麗だよなー。なんというか新鮮だし」
「あ、ありがとうございます！」
「なに？　秋兄ぃもユキちゃんを狙ってるの？」
「そうでんですか！？　でも、その……ごめんなさい」
「違ぇよ！！　しかもなんだ……新年早々告白してもないのにフラれた気分だぜ……」

「言葉の通り、新年早々告白してもないのにフラれたんだよ秋兄ぃ」
「誰のせいだと思ってるんだ！？」
「秋兄ぃの実力」
「ひ、ひどい……」
新年早々元気な奴らだな。
俺はもうすでに疲れてきたというのに……
「あ、そうそう。今気付いたんだけどさ」
琴音がなにかを思い出したらしく、秋に向かって話をしている。
「なんだよ？」
「私、家にかばん置いて来ちゃったみたいで……」
どうやら、忘れ物らしい。
「……で？」
「だから秋兄ぃ……ね？」
「……なんだその俺に対する期待に満ちた目は。自分で行けよ」
「ほら、誘拐とかされたら大変じゃん？」

「そうですよ。琴音っちはか弱いんですから！」

二人の会話に、ユキが乱入した。

てか、琴音がか弱い……？　何をバカなことを。

「で、でもだな」

「シュウはお兄ちゃんなんヨから我慢しないとダメなんヨ！」

エメリィーヌも参加。

「えぇー。なにその理不尽な理由」

……こんなに人がいるというのに……秋の味方が誰一人いない。……どんまい。

「ほら、みんなもこう言ってることだし！可愛い妹のお願いなんだよ？」

「うわっ、ズルい！てか、どこの世界に兄貴をパシリに使う可愛い妹がいるんだよ」

「ここにいるよ」

「パシリに使ってるのことを認めやがった！！本人の目の前で認めやがった！！」

秋、お前どこまで残念なんだよ。

「そういうわけだから、よろしくね」

「どんなわけだよ！！」

「ちょっとの間走ってくるだけじゃないですか。秋先輩」

「白河お前、俺たちの家の場所知らないくせによくそんな事が言えたな……あ、そうだ」

「言っておくんヨが、超能力で連れて行くのは嫌なんヨからね」

「えぇ！マジで！？」

秋ってばすっかり遊ばれてるな。

てか、俺に一言いってくれれば庇（かば）ってやるのに。

「往生際が悪いよ秋兄ぃ！男の子でしょ！」

「いや、確かにそうだろうけどもさ……ほ、ほら、そろそろ出掛ける時間だし！海に迷惑だろ。なぁ海」

秋が俺に助けを求めてきた。

しょうがねぇな。

あいつも悲惨だ。庇ってやるか……。

「俺は、こんなに可愛い妹に頼まれたら動くだろうなぁ。あ、時間の事は気にするなよ。いつでもいいから！はは！」

「マジかよ……」

あ、間違えて琴音を庇っちまったぜ！いやぁー、ミスッた。ハッハッハ。

「くそ……海の笑顔が無性に腹立つ」

「ほら、海兄ぃもそう言ってることだし、よろしく！！」

「……わかったよ、かばん取ってくればいいんだろ。ちくしょー！！！」

最後の琴音の一言で、秋は元気よく外に飛び出して行った。

そうそう若い人は元気がなくちゃいかんのだよ。

そんな時。

「こっとねっちゃぁぁん！！！！！」

カメラを片手に、突如雄たけびをあげるオメガ。

あ、さっきまで姿が見えないと思ったら……カメラを探してたのね。

凄い雄たけびと共に、まるで大砲に打ちだされた砲弾のごときスピードで琴音に飛び付くオメガ。

一方琴音は、待ってましたと言わんばかりの顔でオメガの方に振り返った。

隙だらけのように見えて隙がない。琴音、恐るべし。

「て、うわぁっ！？」

と、思っていたのだが、今現在の琴音の格好は、普段着なれていない振袖姿。

勢いよく振り向きすぎたがために、どこかしらでなにかしらが生じたらしく、バランスを崩したようだ。

ちょうどその時、変態式大型砲弾が琴音の元へ……

オメガもこのことを予期してなかったのだろう。

多分、殴られること前提で飛びこんでいるのだと思う。

だって、頭に鍋を被っているんだもの。

だが突如琴音がバランスを崩したがために、猛スピードでツッコんでいったオメガは……

ほら。よく言うじゃないか。変態は急には止まれないと。

「うわっ！？」

「なぬっ！？」

二人して衝突。

いや、オメガはまだいい。

琴音なんか、オメガの被っている鍋が顔面に直撃。

倒れた時にオメガの下敷きに。

つまり、『変態に押し倒される少女』という、なんとも可哀そうな絵の完成だ。

まぁ、実際は、押し倒されるというよりクラッシュした感じだし、琴音は鼻を打ったらしく、鼻を押さえてちょっと涙目だし。俺んちのカーペットの上だし。

皆が想像するような、ハッピーなシチュエーションとは程遠い感じだ。

琴音からしてみれば、それでも最悪だとは思うけどな。

「こ、琴音ちゃん大丈夫！？」

オメガはすぐにその場から起き上がり、変態とは思えぬ優しい言葉を琴音に投げかける。

「っつ……っ……！！」

あまりの痛さに言葉がでないようだ。

確かに、『スッコーンッ』っていい音が鳴ってたからな。

「琴音っち……悲惨です」

必死に鼻を押さえて痛みに耐える琴音に、ユキが同情の言葉を呟く。

「どっちもどっちなんヨ……」

エメリィーヌは呆れ果てているようだ。

てか、琴音大丈夫かよ。

こんな日に鼻骨折とかしてないよな？

とりあえず、琴音の痛みが引くまで見守り続ける俺達。

琴音の隣に座って、心配そうに見つめる鍋を被った変態―もといオメガ。

しばらく見ていると、ようやく痛みが引いたようで、ゆっくりと琴音が体を起こし始める。

……が、しかし。

「むっ！？　琴音ちゃん！！止まるんだ！！そのまま！！」

「へっ？」

突如オメガが大声をあげる。

そのせいで、琴音が中途半端な角度で身動きが取れなくなってしまった。

あの体勢はつらい。

腹筋の最中の起き上がる直前のような体勢だ。

「きょ、恭兄ぃ、どうしたの……？」

琴音すげぇな。

よくあの体勢で耐えられるよ。

ちょっと身体が震えてきたな。もうそろそろ限界か？

そして、オメガは。

「琴音ちゃん、ゆっくり！そのままゆっくり横になって！！」

「へ？」

「いいから早く！！」

「う、うん……」

オメガの迫力に琴音が圧倒されて、変態の言うがままに再び横になる琴音。

いったいなんなんだ。

「横になったら、しばらくそのままで」

「何なの……？」

「えっと、ここで、僕が琴音ちゃんにまたがる形となって……」

おいおいおいおい。

オメガの変態的行動で、正真正銘の押し倒す形となった。

「へ！？　あ、え！？　恭兄ぃ！ちょっと！？」

「琴音ちゃん！静かにして！！動かないで！！」

「はぁ！？　え、ちょっと！！腕押さえないでよ！！」

さすがの琴音も、男の力、それも上から押さえつけられたとなっちゃ、抵抗出来ないようだ。

てか、なにしてんのお前！？

「眼鏡先輩……！？」

ユキは唖然。

オメガの突然の行動に、変態慣れしていないユキは言葉を無くす。

「キョウヘイ……何してるんヨか……」

エメリィーヌはとても呆れている。

つーかエメリィーヌ慣れ過ぎだろ。……まぁ、オメガと一番つるんでるのはエメリィーヌだしな。

その時、オメガが突如叫ぶ。

「山空！写真写真！！」

「……は？」

突然何を言い出すんだよこの男は。

「いやぁ、せっかく初めて琴音ちゃんとあんなに密着出来たんだから。記念にツーショットを。と思ってね」

「……その体勢の理由は……？」

「出来るだけさっきの出来事を再現したんだよ。どうせならその体勢で撮りたいじゃん？」

いや、再現出来てないぞ。

そんな今にも襲いかかりそうな体勢じゃなかった。

９２％ぐらいお前の妄想だろ。

「やめろー！放して！！変態！！！」

琴音が暴れている。

「ほら、山空。そこのカメラで一枚！」

「どけー！！……死ね……アホー！！！」

……気のせいだろうか。

今、琴音が恐ろしい言葉を、ぼそっと恐ろしいトーンで呟いたような……。

「山空早く！！……あ、カメラの使い方ね。そこの上についているシャッターを…あ、シャッターって分かる？　ボタンだよ。あ、ボタンって分かる？」

ぶっ飛ばすぞお前。

ボタンが分からないって俺はどこの田舎者だよ。なめるなボケ。

「海兄ぃ！！そんなことしたら絶命だよ！！」

ぜぜぜ、絶命！？　殺されんの俺！？

普通絶交辺りだろ。

つーか琴音。暴れるなよ。振袖が乱れてきてるぞ。

「あ、それは大丈夫。下に服着てるから」

「なぬっ！？」

なんだよ。また俺喋ってたのか。

てかオメガ。『なぬっ！？』って何だよ。なにを期待してたんだよお前。

「そんな事より山空！！早く写真をぐおっ！？」

「そこまでだ恭平。これ以上妹に変な事してみろ。ゆるさねぇぞ」

『ゴツンッ』と、オメガの頭を容赦なく、鍋もろともぶん殴った秋。
今話初登場にしては無駄にカッコいい登場だ。
「初登場じゃねぇよ！！琴音と一緒に来たろ！？」
あぁ、いたな。確かいたわ。
と、俺が納得していると、琴音はゆっくり起き上がり、乱れた振袖を直しながら……。
「……あぁ、確かに一緒だったね！」
「えぇ！？　琴音お前まで！？　嘘でしょ！？」
「すっかり忘れてたよ。それよりも、なんでもうちょっと早く助けてくれないの！？」
「そ、そんな……てか、お前が頼んだんだろ！！これ！！」
そう言いながら、琴音に何かを突きだす秋。
……かばんのようだ。肩から掛けるタイプの。
「あ、そうだったね。ありがとう」
「まったく、人に頼んでおいて忘れるなんて酷い奴だな」
あぁー、確か頼んでたな。モメてた。

てか足早いな。もう戻ってきたのかよ。
「ついうっかり。えへっ♪」
琴音は、渾身の『ドジっちゃった、えへっ』な顔をした。
「そんな顔しても許さん！！」
当然、秋は許さない。
「許してよ」
「許す」
「ケチ……って、許してくれるんだ」
「いや、許せって言ったのお前だろ」
「言ったけどさ。あっさりすぎない？」
「なら俺にどうしろと？」
そんなバカみたいな会話をしている二人に、秋に殴られてへばっていたオメガが。
「琴音ちゃんを僕にください！！」
「「お断り！！」」
「ぶべっ！？」

二人に殴られていた。

――――てなわけで、俺達はこれから出掛けるわけだが……。

それはまた、別のお話。後編で会いましょう！！

つーかやっぱり最後は殴られて終わりかよ。

まぁ、前編のオチなどどうでもいいか。

果たしておれたちは無事に初詣に行く事が出来るのか。

不安でたまらないぞ……。

俺日！お正月特別編！！（前編）　完――――後編に続く。

俺日！お正月特別編！！（前編）～明けましてオメガ暴走～（後書き）

琴「ところで海兄ぃ、そのおでこに貼ってあるのってなに？」

海「え？　でこ？　……あ、これ、オメガのシールだ……」

エ「ずっと貼りつけてたんヨか……」

俺日！お正月特別編！！（後編）～年の初めの初地蔵～（前書き）

後編です！

俺日！お正月特別編！！（後編）～年の初めの初地蔵～

オッス！秋だぞ！

え、ちょ、海じゃねーよ！！秋！竹田　秋！！

ちょっと、なに露骨にガッカリしちゃってんの！？　俺ってそんなあれか！？

あ、ちょっと！！戻らないで！！最初だけだから！すぐに海と交代するから！！

「秋兄ぃ、気にしすぎだよ……。大丈夫だって」

「そ、そうかな」

「そうそう。誰もそんな事思わないよ。……きっと」

「なんだよ今の間は！！」

「ほら、早く進めないと終わっちゃうよ？」

「わ、わかったよ」

「それじゃ、頑張ってね！」

……はぁ。

本当に大丈夫なんだろうか……。

まぁ、気にしてても仕方がない！張り切って、前回のあらすじを……。

前回のあらすじ！！

今日は一月一日。元旦だ。

色々あって、海の家に集まる事になった。

あ、海（うみ）じゃなく、海（かい）の家だからな。

で、俺は、妹の琴音と一緒に、海の家に向かった。

で、到着。

そのあとは……そうそう、琴音が忘れ物したみたいで、なぜか俺が自分の家に取りに戻ったんだ。

琴音が振袖着てたから、自転車じゃなくて歩きで来たんだよ。

だから凄い疲れた。

琴音の忘れ物は玄関に置いてあってすぐ見つかり、めんどうだから、俺は自転車で海の家に戻った。

戻る途中、同じクラスの奴らにもあって、なんとなく声をかけたのだが。

忙しかったらしく、反応せずにどっか行ってしまった。

そして海の家に到着。インターホン押したのに誰も出てこないので、勝手に上がらせてもらった。まぁ、一度来てるから大丈夫だ。

そしたら、琴音が恭平に押し倒されてた。

そんなもの見てしまったら、兄貴として助けなければいけないわけで。

思いっきり恭平をぶん殴ってやった。なんか鍋被ってて、手が凄い痛かったのは内緒。

そんな感じかな。

……って、今思ったけど、俺って前回ほとんどいなかったな……。

「しかもあらすじじゃなくなってるし、無駄に長いしね」

「また琴音かよ。いいだろ、せっかく目立てるチャンスなんだから！」

「そんな長々とやってると嫌われるよ？　それに、どうせみんな『ｚｚｚｚｚｚｚｚ』ってなってるよ」

「え！？　みんな寝ちゃってるの！？　話の途中で寝るのは校長先生の時だけにしてくれ！！」

「それじゃ、後編をどうぞっ！！」

「あ！それ俺のセリフ！！」

「なら早く言いなよ。もう時間切れ間近だよ」

「うわ、あと5秒しかない！！」

「ほら早く！」

「お、おう！それでは、こ【時間切れ】

俺日！お正月特別編！！（後編）
～年の初めの初地蔵～

やぁ、海（カイ）だ。

後編しょっぱなから、見苦しい男の下らん茶番をお送りしてしまった事を、心からお詫び申し上げ……いや、なぜ俺がお詫び申し上げなくちゃならない。

後でキッチリと落とし前をつけてもらうよう、バッチリとシバき倒しておきますゆえ、お許しくださいますようお願い申し上げます。

まぁ、琴音もちょこっと出てきたし、それで何とかなると信じよう。

そんなわけで、本編に戻りたいと思う。どぞ。

≪日本晴れ！！≫

いきなり変な発言をしてしまったな。

まずは順を追って説明しよう。

今日は元旦、1月1日だ。ちなみに、午後1時12分。

おしかった。あと1分早ければゾロってたのに。

まぁ、つまりは、みんなで初詣に行きましょう。ってわけだ。

皆というのはもちろん。

冒頭で茶番を繰り広げた、秋(しゅう)。その妹の琴音(ことね)。宇宙人のエメリィーヌに、変態のオメガ―もとい恭平(きょうへい)。変人のユキ。

そして、この俺、山空(やまぞら)　海(かい)の計6名。

個性豊か（個性無し含む）な面々で、歩いてきたるは我が家から一番の最寄りの神社だ。

人が少ない時間を見計らってきたというのに、その甲斐むなしく、見渡す限り人、人、人。

まるで人の展覧会やぁ！！

ってなわけだ。

で、最初に言ったと思うが、今日は日本晴れなわけで。

雲ひとつない青空。照りつける太陽。

冬の風が身体を程よく冷やして去っていく。てか寒い。

せっかくの正月だというのに、なんでこうも人が多いんだか。

今昼だぞ。昼飯どうしたんだ。こんな時間に初詣に来るなよ。ファミレス行ってこいよ。

「こんな日にファミレス行く奴いねーだろ」

うるさいぞ秋。お前初っ端喋りまくったんだからもういいだろ。出て来るなよ。

とにかく、もう一度だけ言う。見渡す限り人なんだよ。

ここは結構広いからな。初詣にはもってこいの神社だ。

ほとんどの女性は振袖姿。男性は普段着の人たちが多いが、袴姿も多々伺える。

何より、子供達の元気な声が凄い聞こえるな。夏祭りでもないのに。

ほらまた。耳をすませるとよく聞こえる。

『お前運ないなー』『くそーっ、大凶か！！』

おみくじを引いている子供達の声。

『へへっ、タッチ！』『あぁ、捕まっちゃった』

やることをすべて済ませた後の鬼ごっこを楽しむ子供達の声。

『うおーっ！！カイ見るんヨー！ハゲなんヨ！！クリクリボウズなんヨ！！』

神社に祭られているお地蔵様の頭を乱暴に叩きながら、ドエラい事を言い放つ子供の……って。

「エメリィーヌ、やめなさい」

お地蔵様になんて事を。

それにしても、ハゲは無いだろう。ハゲは。

……って、なんで神社に地蔵？　普通狛犬とかだろ。

地蔵は寺じゃなかったっけか。……まぁ、いいか。

「カイー、ツルツル！ツゥルツル！！」

だからやめろ言うとんのじゃボケ。

いつまで頭をさすれば気がすむんだよ！

ほら、周りの人見てるから！！クスクス笑われてるから！！

「ダメですよエメちゃん！」

ここで、ユキが止めに入る。

ナイスだ。俺には今のエメリィーヌに近づく事は出来なかった。恥ずかしくて死ぬ。

だから、ユキ。お前がいてくれてマジ助かった！！ありがとう！

エメリィーヌに近づき、そっとエメリィーヌを抱き上げるユキ。
その姿は、保母さんそのものだった。
ユキは絶対に保母さんになった方がいいと思う。むいてる。絶対むいてるよ保母さん。
ユキは子供っぽい所あるから、子供たちと同じ目線に立って話とかできそうだしな。
……いや、最初から同じ目線なのか。頭の中子供だもんな。
「あー、うーみん先輩。今何か失礼なこと考えてましたですね？」
エメリィーヌを抱きかかえたまま戻ってきたユキが、むすっとした顔で俺を見て来る。
いや、そんな事はどうでもいい。あれだけ言ったのにまだ分からないのかお前は。
「外でうーみんって呼ぶなぁ！！」
ここにクラスの奴らがいたらどうすんだよ！
ただでさえ彼女だのなんだのって変な噂が立ってるのに。
「本当の事だろ？」
「真顔で何言ってんだ。影薄」

「影薄って誰だよ！！」

秋も絶好調だ。

っと、あれ？

オメガの姿が無い。

俺の右隣に立っていたはずのオメガが、いつの間にかいなくなっている。

「琴音。オメガどこ行った？」

「なんで私に聞くのよ」

うっ、琴音、目が怖い。

オメガといったら琴音だから、つい琴音に聞いてしまった。

つーか、何も言わずにいなくなるなよ。子供かあの変態は。

「くそー、オメガの奴。どこ行きやがった」

俺は周りを見渡してみる。

オメガの事だ。

どーせ、そこらへんの女の子と仲良く会話してるんだとは思うが……。

何せオメガだからな。襲いかねん。

こんな日に警察にとっ捕まりました。なんて事になってみろ。

しかもナンパに近い行為で、俺の知り合いなんて事になったら。
……多分他人の振りをするな。うん。
「おい海。恭平いたか？」
秋が聞いてきた。
「全然いない。あいつこの短時間でどこ消えたんだよ」
あいつ銀髪だからな。すぐ見つかるはずなんだが……。
「日頃の行いが悪いから神の裁きでもあったんじゃないの」
おい琴音。そんな顔でそんなこと言うなよ。本気にしちゃうだろ。
「恭平の奴どこ行ったんだよー！隠れてないで出てこーい！」
「秋に言われると、さすがのあいつもさぞムカつくだろうな」
「なんでだよ」
「お前の方がいつもいなくなるだろ？」
「そーいう意味かよ」
あれ、絡んでこない。
ちょっと怒らせたか？　まぁ、いいか。

「シュウ！向こうの方に行ってみるんヨ！！」

エメリィーヌは、とても嬉しそうに秋の手を引く。

地球の行事が珍しいのだろう。

こんなにはしゃいでいるエメリィーヌを見るのは久しぶりだ。

そして、なんでこういう時いつも秋なんだ。道に迷ってもしらねぇぞ。

言い忘れていたが、秋は極度の方向音痴だ。みんな忘れていると思うが。

秋に道案内を任せてみろ。さんざん彷徨（さまよ）ったあげく、意味の分からない所に迷い込み、持ち前の影の薄さでヒッチハイクもままならない。

タクシーさえ止まってくれないことだってある。

そんな奴といっしょに出かけるのにも、かなりの苦労だ。

まぁ、そのおかげでエメリィーヌと会えたと言っても過言ではないのだが……。

そして一番腹が立つのが、本人が自覚していないという事だ。

かの有名な、沖野宮（おきのみや）　来栖（くるす）（※架空の人物です）はこう言った。

『己の信じた道を歩め。さすれば道は開ける』と。それは間違いだ。

秋に己の信じた道を歩ませてみろ。航空機を使わずにイギリス辺り

まで行ける隠し通路とか見つけかねん。

でもまぁ、さすがに学校までの道や、自宅に帰るまでの道は覚えたらしいな。

だがそれでも、半年ぐらいその場を離れてみろ。家に帰れず路上生活の幕開けだ。

てなわけで、エメリィーヌに引っ張られ歩きだそうとする秋に、一言だけ告げておく。

「秋！携帯の電源を常時入れておけ！！」

「ん？　分かったけど。なんなんだ？」

「そしてエメリィーヌ。これ持ってけ」

俺は自分の首に掛けておいたあるものを取り、エメリィーヌに渡す。

「ヨ？　なんでなんヨか？」

「いいから、首から下げとけ」

「分かったんヨ。じゃ！シュウ行くんヨ！」

「お、おう！」

そう言って二人は人ごみの中へ消えて行った。

ちなみに、エメリィーヌに渡したのは、あいつの勾玉だ。

あいつはその勾玉を持つ事によって、さまざまな超能力を使う事が出来る。

念力。とかな。もちろん、瞬間移動もできるのだ。

でも、調子に乗って使い過ぎると、エメリィーヌの気力が持たず、大変なことになる恐れがあるので、普段は俺が管理している。ってわけだ。

「海兄ってば、どんだけ準備が良いのよ」

俺の隣に立っている琴音が、若干呆れながら言ってきた。

ふふふ。この俺をなめてもらっちゃ困る。

一番注意深い男なんだぜ俺は。

ふふふ。ふふふふふ。

「海兄ぃ、そんな気持ち悪い顔してないで、やる事さっさと終わらせちゃおうよ」

おい。気持ち悪くて悪かったな。

てか琴音さっきから元気がないな。いったいどうした？

俺が心配そうに琴音を見ていると、それに気づいたのか、琴音が言った。

「ほら、私、人の多い所とか基本苦手だから」

「人見知りだからか？」

「それもあるけど……なんかね。疲れるんだよ」

琴音、この若さにして、精神はとっくに年老いてやがる。

てか、ユキまで見当たらん。どこいった。

「『海先輩に迷惑かけるなんて。眼鏡先輩、見つけてとっちめてやりますです！』だってさ」

ユキの口真似をして、俺の疑問を解いてくれた琴音。しかも妙に似ている。

つーかさ。その行動が迷惑なんだよね。

せめてどこ行くとか告げてけっつうのに。

まぁ、子供じゃないしな。大丈夫か。……大丈夫だよな。

「先にもう、すませちゃっていいってさ」

そうか。皆で来た意味がないような気もするが、良しとしよう。

「じゃあ、やる事ちゃっちゃと済ませて、皆を待つ事にしよう」

「賛成！」

うお、急に元気になりよったわこいつ。

そんなわけで、俺は琴音と一緒に人ごみの中へと歩きだした――――

特にこれから変わった事もないので、久しぶりに秋へバトンを渡すとしよう。

語りが秋になっても、どうかそのまま、優しく見守ってあげて欲しい。

え？　そんな適当でいいのかって？　ふふふ。いーのいーの。

どーせ特別編だし、普段出来ない様な事も簡単に成し遂げてしまうのだ。

てな訳で、語りチェンジ。秋、よろしく！――――――

「シュウ！みるんヨ！！ツルツルがいっぱい！！」

神社の右奥へ進むと、入口付近でもあった地蔵が五体綺麗に並んでいた。

この場所が結構な隅だったがために、周りに人は少ない。

そしてお地蔵さまは、一番でかいので、全長1メートル近くある。

右から背の順で。まるでマトリョーシカ人形のようだ。

地蔵の足元には、ジュースの空き缶がお供えされている。

誰かがふざけてお供えしたに違いない。

……不気味だな。

罰(ばち)が当たったらどうするんだよ。てか、なぜこんな所に地蔵が五体も。

昔、この神社で何かあったのか？　……怖。

「シュウ！ほら！ツルツル家族！」

エメリィーヌは陽気に、一番大きいお地蔵さまの頭を、懸命になで続けている。

海(かい)の奴、ちゃんとエメリィーヌの世話してるのかよ。

こんな事させて、もしなんかあったりしてからじゃ遅いんだぞ。

ここは、兄貴経験が豊富なこの俺が、キッチリとエメリィーヌに教え込まなければなるまい。

俺は一歩踏み出し、エメリィーヌに真剣な表情で伝えた。

「お地蔵様に失礼なことするなよぉ……！夜中に化けて出てきたりするだろぉ……！」

「……そんな遠くで怯えながら囁(ささや)かれても困るんヨ」

遠くとは失礼な。俺とエメリィーヌまでの距離は、約3メートルほどだ。

「し、しょうがないだろ！ほら、今首が動いた気がする！！」

ひぃ！！目が怖い！！不気味だ。不気味すぎる。

「首なんて動いてないんヨ。しかもまだ明るいんヨ？」

エメリィーヌ。よくそんなものに近づけるじゃないか。

俺は無理。自慢じゃないが、俺はかなり怖がりだ！

チキンでも何でも言うがいい。怖いもんは怖いんだ。もう体が拒絶反応起こしてるんだ。

明るかろうがそうで無かろうが、夜中に化けて出られでもしたらたまらん。

「ツルツルー♪」

だからやめろエメリィーヌ！！

あぁ、地蔵様の頭の上に乗っちゃったよ！怒る。絶対怒るよ。地蔵さまのたたりにあうよ！

てかなぜ片足で立ちあがる！！バランス凄いなエメリィーヌ！！まるで白鳥の湖を踊っているバレリーナのようだ！

いや、ここは妖精と言った方がいいかもしれない。

……妖精じゃない、妖精なら地蔵様の頭の上で踊りはしない！！

「アルプス一万尺～♪」

歌いだしたー！！！

つーか何で童謡知ってんだよこの宇宙人！！

「坊主の上で～♪」

替え歌かよ！！

てか坊主の上じゃない！！地蔵の頭の上だ！！

「アルペン踊りを　さぁ踊りましょへイッ♪」

ヘイッ♪じゃねぇだろ！！踊るなー！！

地蔵の頭の上で踊るんじゃない！！お地蔵さまの上だけはやめてくれぇ！！

いや、坊主の上でもダメだけども。

つーか、本家は小槍の上だろ。小槍の上で踊るはずだ。……危ないな。

よい子のみんなは、小槍の上で踊らないようにしようね！！子ヤギじゃないよ！こよりでもないよ！！

間違って覚えていた方。恥ずかしい思いをする前に覚えておこう！！

余談だけど、アルプス一万尺は歌が２９番まであるらしいね。

って、いつまで踊ってるんだエメリィーヌ！直ちに降りろー！！

そんな時だった。

エメリィーヌが乗っている一番背の高い地蔵が、エメリィーヌの重さで傾き始める。

「あぶねっ！！」

俺はすぐにエメリィーヌに駆け寄り、エメリィーヌが転げ落ちる前に抱き抱える。

そのあとすぐに……地蔵様が……ガンッ、ガンッ、ゴツンッ、ゴンッ、ガツンッ。

ドミノ倒しのように、リズミカルに次々と横になられる地蔵様達。

「あ、危なかったんヨ……シュウ、ありがとうなんヨ」

「楽しいのは分かるけど、浮かれ過ぎだぞ……って、お地蔵様がぁ！！」

俺が助けなければ、今頃エメリィーヌは地蔵の下敷きだ。

地蔵さまはミニサイズといえど、結構な重さがある。頭でも打てば、大怪我になる所だった。

そんな事よりも、地蔵様がお倒れなすってしまった。

やってしまった。これはまずい。

「ど、どうしよう！！……って、ん？」

五人中三人目の地蔵、つまり、中央のお地蔵様を見てみると、なんか顔面が緑色に染まっている。

その緑色の何かは、地蔵の顔から地面をたどり……俺の足元の……空き缶に！

ま、まさか。

俺はそっと足をどけてみる。

するとそこには、『森林伐採青汁』と書かれた、さっきお供えして

あった空き缶。
どうやらまだ中身が残っていたようだ。
結構な量が残っていたようで、地蔵の顔にぶちまけられたそれは、
雫となって滴り落ちている。
俺のお気に入りのスニーカーも、白から緑にカラーリング済みだ。
ははは。

って、どっど、どうしよう！
とりあえず顔を綺麗にしよう！！
俺はエメリィーヌを地面に下ろし、ズボンの左ポケットからハンカチを取り出す。
取り出したハンカチで、地蔵の顔を拭こうとした時に気付いた。
周りにレースがひらひらとして、四隅のうち一か所にだけ、可愛いピンク色したリボンの絵が刺繍（ししゅう）されている。丁寧に洗われ、洗剤のいい匂いが漂っている。
そして、買ったばかりのように真っ白だ。
それが、今俺が手にしているハンカチの実態。
それはまさしく、琴音が大事に使っているハンカチだった。
なぜ、このハンカチをこの俺が？
若干パニックになった頭で記憶を遡（さかのぼ）ってみる。
えーと、今日の朝着替えて……、海（かい）の家について……琴音の忘れたかばん取りに行って……あぁ！！

そうだ、あの時、琴音のかばんからこのハンカチが落ちて……。
勝手にかばんの中身を見るのもあれだから、あとで届けようと思ってたんだった！！
それまで、ポケットに……。

って事は、右ポケットに俺のハンカチが……

俺は何とか思いだし、右ポケットを漁ってみる。すると。

「あったぁぁ！！！」

見事自分のハンカチを見つけ、地蔵様の顔を拭こうとした時だった。

……まてよ。
この青汁、前、海が買って、道路にこぼしてたよな。
で、次の日雨が降って……そうそう、その次の日見たら、まだあとが残ってたんだよな確か。

『雨の中に打たれても消えない青汁の緑って……何の成分使ってんだよあの青汁……』

とか何とか言っていた気がする。

やばい、早く拭かないと地蔵さんが一週間近く、顔色最悪な状態になっちまう！！
でも、このハンカチ……確か琴音が、去年の俺の誕生日にくれたやつなんだよなぁ。

かと言って琴音の大事にしてるハンカチを使うわけにもいかないし

……。

でも、俺のハンカチも琴音からのプレゼントで大事に使ってたしなぁ……。

てか、早く拭かないと地蔵が！！

でも、拭いたら絶対シミになるよなぁ……。

いっそのこと、琴音のハンカチを！使える訳ないしなぁ。

でも、俺のもかなり大切なんだよなぁ。

地蔵か、琴音か、ハンカチか、地蔵か、琴音か、ハンカチか……。

いや、やっぱり琴音のは選択肢に入れちゃいかん。

地蔵か、ハンカチか。俺に問われているのはその二択だ。

「シュウ、何してるんヨか？」

俺が悩んでいると、エメリィーヌが不思議そうな顔で聞いてきた。

やべ、エメリィーヌの事すっかり忘れとった。

「実はさ。このハンカチ、両方とも大切なものなんだよ。シミになっちゃうからどうしようかと……」

そう告げると、エメリィーヌはしばらく考える動作をしたのち、閃(ひらめ)いたように提案してきた。

「……まだ誰にもばれてないんヨし、逃げちゃえばいいんじゃないんヨか？」

逃げる。

そんな選択肢、頭の片隅にすら浮かばなかった。

エメリィーヌの言うとおりだ。

逃げてしまえば何の問題もない。……だけど。

「そんな事して、祟られたらどうするよ！？」

「祟りなんてある訳ないんヨ」

「ある訳ない。本当にそうだと言い切れるか？」

「言いきれる……こともないんヨね」

「だろ？　見たことないからと言って、無いと断定するのはダメだ。だって、宇宙人がいるぐらいなんだからな」

そう、エメリィーヌがいるくらいなんだ。

超能力だってあったし、きっと祟りもあるに違いない。

「……そうなんヨね。なら、早く拭かないとダメなんヨ！」

「そこなんだよ！！どうしよう……！！」

早く拭かないとダメ。

でも、今手元には大事なハンカチ二種類のみ。

地蔵を見捨てて祟りの恐怖におびえる夜を過ごすか、どちらかのハンカチを使い、一生緑色に悩み続けるか。

二つに一つ……。

「……そうだ！！」

そう、俺は閃(ひらめ)いた。いや、見つけたと言った方が正しい。

地蔵の顔だけではなく、華麗にカラーリングの餌食となった物があと一つだけある。

……俺の右足のスニーカーだ。

見事に真緑と化し、最初の原色は見受けられないほど。

そんな中、左足のスニーカーはまったくの無傷。無事なのだ。

このままじゃ、色違いの靴をはいた曲芸師のような感じになってしまう。

つまり、この無事生き延びた左靴には悪いが、お前も緑に染め上げてやるぜぇぇ！！

俺は勢いよく左足のスニーカーを脱ぎ、地蔵の顔面に押し当て……ようとした時にまたしても問題発生。

その問題を生み出したのが、エメリィーヌの一言だ。

「色違いの靴をはいた方が、目立つんじゃないんヨか？」

「……なに…？」

その言葉で、俺は迅速に靴を履き直し、左足のスニーカーを選択肢から外した。

これで振り出しだ。

もう時間が無い。乾ききってしまう。

そんななか、俺は自問自答を繰り返す。

……いいのか俺。

自分の欲望の為だけに諦めていいのか？

例え目立てても、その時俺は満足できるのか？

いい訳がない。……でもなぁ？

おしいよな。せっかくのチャンスだもんな。

もしかしたらお地蔵様がくれたチャンスかもしれないもんな。

やっぱり靴は無しだ。

「シュウ、早くしないと乾いて来ちゃってるんヨ！！」

エメリィーヌが隣で急かしたてて来る。

地蔵、ハンカチ、靴……地蔵、ハンカチ、靴……地蔵……ハンカチ……靴……あぁ！！！

頭の中で、地蔵とハンカチと靴がグルグルと渦巻き、徐々に加速してミックスされる。

で、真の姿となって現れる。

地蔵の首にはハンカチ。そして色違いのスニーカーを履いて、目を光らせながら俺に迫ってくる。

来るな来るな！！夢にまで見そうだ！！

くそっ、早くしなくちゃ……どうする、どうする……。

俺は必死に考えた。だが、ハンカチスニーカーのお地蔵様がニヤニヤと薄気味悪い笑みを浮かべて迫ってくる。

……あぁ、もうダメだ！！来ないで！！ごめんなさい！！すぐ拭くからぁぁ！！

「あぁぁぁ！！！！うおぉぉぉ！！！！」

「し、シュウ！？」

迫りくる地蔵様に耐えかねた俺は、両の手のハンカチをポケットにしまい、そのまま両手で顔色最悪地蔵の顔面を撫でまわした。

「拭くのが無けりゃ、己で清めるのみさぁぁ！！！」

そりゃもうやけくそで地蔵の顔を撫でまわす俺。

俺の両の手のひらが、みるみるうちに変色して行く。

「うりゃぁぁぁ！！」

撫でまくる。

撫でまくること早5分。

「ぜぇ……ぜぇ……」

「シュウ……余計に広がってしまってるんヨ」

「分かってる……そんな事は分かっている」

手のひらだと、拭くというより塗り広げる状態になった。なってしもうた。

まるでコケが生えたような状態のお地蔵さま。正直、最初よりも最悪な状態である。

くそ……くそ……。

「こなくそぉぉ！！！！」

俺はその現実に耐えきれず、もう何の中途もなく、琴音のくれた大事な。とても大切だったはずのハンカチを取りだす。

で。

「ぬかみそぉぉ！！！！」

意味の分からない雄たけびと共に、地蔵の顔面に擦り付けた。

そんな時。

ポロッっと……地蔵様の……顔が……ギャァァァ！！！

取れた！！顔が取れおった！！顔からサッカーボールになり果ておった！！！

終わった。これは終わった。もうだめだ……。

地面に両手両膝を突き、思いっきり落ち込む俺。

そんな時、ある人物と出会った。

「エメルじゃないか！こんな所でどうかしたとね？」

「あ、キョウヘイ」

俺がゆっくりと顔をあげ、声のした方に振り向くと、そこには、序盤でいなくなったはずの恭平の姿。

難しい顔をしながら、ノートパソコンで何かをしている途中だったようだ。

「恭平！お前いい所に来た！！」

これはチャンス。

ラッキーとしか言いようがない。

説明しよう！

恭平は色々な珍道具を持っているのだ！

「なんだ。竹田兄か」

俺の顔を見るなり、これ以上ないくらいの分かりやすさでガッカリしている恭平。

竹田兄だよ。なんか文句あるか。

「で、僕はどうやら都合の悪い所に来てしまったらしい。さらば！」

そう呟いた途端、オタクとは思えぬ瞬発力でかけだしていこうとする恭平。

俺は慌てて引きとめる。

「琴音の兄貴の頼みなんだぞ！！」

「ハッハッハ。僕は兄貴には興味が無い！！さらば！！」

ちっ、しぶとい。

こうなったらあの手しかない。持ち出すんだ。わが妹の名前を！

「頼む恭平！琴音のためなんだ！！」

俺は恭平に告げた。

すると恭平は、その歩みを止め、俺に向きなおる。

こ、効果は抜群か！？

だが。

「ふふふ。僕が琴音ちゃんの頼みなら動くとでも思ったのかい？」
恭平は険しい表情で、一歩。また一歩俺に近づいてくる。
「そういうズルイ考えを持っている以上、僕は絶対に協力はしないと言えるだろう」
嘘つけよ！正直に話したところで、走って逃げて行くだけだろ！
「だから、竹田兄には悪いが……」
恭平がとうとう俺の目の前までやってきた。そして。
「たとえ、琴音ちゃんの頼み……琴音ちゃんの……フッ。用件はなんだ？」
「聞いてくれるのかよ！！」
「どうやら僕は、気が変わったようだ。なにせ、琴音ちゃんの頼み……フフッ。琴音ちゃんの……ふふ。むふふ」
思いっきり効果あった。抜群どころじゃない。
効果超絶大じゃねーか！
しょうがない、琴音と恭平には悪いけど、祟りに会うよりはましだ！
「で、どんなことなんだい？　その、琴音ちゃんの頼み……ふふっ。琴音ちゃ……好きとかいきなり言われても我輩困るぞよ……ふふ」

ちょ！俺の妹でなんてことを妄想してるんだ恭平！！
琴音……ごめんなさい！！俺のために、今だけ妄想の餌食となってください！！

「キョウヘイ、実は、かくかくしかじかなんヨ」

エメリィーヌが、手短に恭平に話をしている。

うーん。小説って便利。一度言ってみたかった。

「なるほど。それで僕に直してほしいと……」

「そうなんだよ。だからこの通り！お願いします！」

俺は両手を合わせ、恭平に心からお願い申し上げた。
そして。

「……断る！」

なんで！？
今絶対に断らぬモードだったじゃん！！

「だってぇ、琴音ちゃん全然カンケー無いって感じだしぃー。てか、カラオケ行かねー？」

「行かねぇよ！！なにその変なギャル口調！！渋谷の女子高生みたいなその口調はなんだよ！？」

「なんかツッコミが爽快だったから、嫌々だが渋々、適当に了承し

よう」

なんだそれ。

凄い嫌味じゃないか。嫌々で渋々で適当って、絶対やる気ないじゃん。

「琴音ちゃんのために竹田兄を殺る気力ならいつでも出せるのだが」

「恐っ！！やめてください！出さないでください！！」

「冗談だしぃー。マジチョーウケルんですけどぉー」

「その喋り方もやめてください！！」

ムカつくから！

「早くするんヨ……」

エメリィーヌが呆れている事に気付いた恭平は。

「ごめんねエメル。コイツがしつこくて」

そう言いながら俺を指差す恭平。

コイツとか言うなよ。

「じゃ、ボチボチやるかね」

そう言いながら、どこから取り出したのか分からない、大型の黒いバッグを地面に置き、ゴソゴソとあさり始める。

数十秒後。

「お、これなんか結構いいね」

そう言って取り出したのは、少し短いマフラーだ。

「なんだこれ？」

マフラーでどうやって直すんだ？

俺が不思議がっていた時、恭平のある言葉のある部分明けをピンポイントに思い浮かべてしまった。

『竹田兄を殺る気力』

まさか、これで俺の首を……。いやぁぁ！！！

「ごめんなさい！！もうしません！！命ばかりはお助けー！！」

「竹田兄。土下座するのは琴音ちゃんを守る時だけにしなさい」

「なんで急に土下座しだしんヨか……理解に苦しむんヨ」

……へ？

俺を絞殺するためじゃないの？

「なら、そのマフラーは……？」

「これか？　その名も『これであなたもカモフラージュ！カメレオ

ンシリーズ（マフラー板）』だ」

「意味が分からないんヨ……」

「エメル、よく見てておくんなましぃー」

そう言いながら地蔵達をすべて立てる恭平。オタクのくせに力あるな。

そして、真ん中の地蔵の頭を持ち、頭を無くした地蔵様の体に乗せる。

「ここからマフラーの出番！これをこの地蔵の首に巻きましてー……」

マフラーで地蔵の首をグルグル巻きに。

「そして、エメル。ここのボタンを押してみ？」

「ここなんヨね」

マフラーの端に、スイッチがついていた。

それを、エメリィーヌが押した瞬間。

「……ま、マフラーが消えた」

首に巻かれたマフラーは、驚く事に一瞬にして消え去ったのだ。

「消えたわけじゃない。同化したのだ」

は？　同化した？

恭平の頭どうかしてるんじゃないのか？

「ほら、カメレオンマフラーだから。カモフラージュだから」

「あー。なるほどー」

恭平の説明によると、マフラーが変色し地蔵の質感をだし、目立たなくしたらしい。

で、マフラーには粘着成分があるから１０年は取れないらしい。

まぁ、なんでもいいや。

とにかく。

「恭平！ありがとう！」

これで、地蔵問題はすべて解決ってわけかぁ。

「でも、顔の緑が落ちてないんヨ」

……そうだったぁぁぁ！！！！

そうだよ、首は治ったけど顔が治ってないよ！！どうしよう！！

「そんな時にはこれ。『カメレオンシリーズ（ハンカチ板）』。これを地蔵の顔にくっつけて、ボタンを押すと……あら不思議、治りました」

マフラーと同じ原理で地蔵完全復活。

これで肩の荷が下りたぜ。……って、俺の両手と俺のハンカチ……。

緑に染め上げられたままじゃん。

「じゃあ、みんなのとこに戻るんヨ！」

「行こうか。エメル」

「待った恭平！俺のこの両手とハンカチを」

「断る」

そ、即答ですか……。

まぁ、しょうがない。

そのうち落ちるんだ。気にしない事に決めた！！

「じゃあ、みんなのとこに戻るか」

「それさっきウチが言ったんヨ」

「竹田兄。パクリ乙」

「ヌガァーー！！」

――――そんなこんなで、海達の所に戻った。

「あ、眼鏡先輩！！どこ行ってたんですか！！」
「竹田兄と今後の琴音ちゃんについて語り合っていたのだよ」
「語り合ってねーよ！！」
「カイー！楽しかったんヨ！！」
「そうかそうか。それは良かったな。本当によかった。迷子になって無くてよかった」
「俺がついてるのに迷子になる訳ないだろ」
「なる」
「うん。秋兄ぃは迷子になるね。絶対になるよ」
「えぇー。琴音までそんな事を……」
「それより、初詣してこようよ」
「あれ、琴音っち達はしてこなかったんですか？」
「うん！皆と一緒にした方がいいと思って！！」
「嘘つくな。『やっぱり面倒だから皆が来てからでいいやぁ。』って言ってたのだれだよ」
「秋兄ぃ」

「俺かよ！！」
「あぁ、そうだった。秋だったな」
「海まで！？　なんでやねん！！」
「秋先輩なんて事を」
「いやいやいや、今戻ってきたばかりだから！！」
「そうなんヨ！シュウはずっとウチと一緒にいたはずなんヨ！！」
「いた『はず』って何だよ！！」
「琴音ちゃん！そろそろ付き合って」
「お断りします」
「ほら、そろそろ行くぞ。……つーか、秋。お前汚いな。まぁ、いいや」
「うん。秋兄ぃ靴も緑だね。まぁいいけど」
「え、何があったか聞けよ！！」
「秋先輩、なにがあったんです？」
「そりゃまぁ、いろいろと」
「めんどうな人ですね」

「えぇー……」

「ほら行くぞ」

「分かったんヨ！」

そんなこんなで、無事初詣も終わったわけだ。
ちなみに、秋に変わって、今は俺、海が話しております。

じゃ、あけましておめでとう！
今年も俺日！こと、俺の日常非日常をよろしくな！

俺日！お正月特別編！！（後編）　完

俺日！お正月特別編！！（後編）～年の初めの初地蔵～（後書き）

海「皆は神様に何を願ったんだ？」

恭「僕は『全少女の平和』を願った」

秋「恭平がいる時点でそれは無理だろ」

琴「私は『今年一年、何事もなく平和に暮らせるように』だね」

秋「平和でよろしい」

雪「ユキは『うーみん先輩と今年一年でもっと仲良くなれるように』と願いましたです」

海「意外と嬉しいからよろしい」

秋「海はどうなんだよ？」

海「『目指せ友達１００人！』ってか？」

秋「子供か！」

海「ならお前は？」

秋「『今年こそ目立ちたい』って」

琴「なんとなく分かってた」

海「エメリィーヌは？」

エ「……そんな事より、初詣って何なんヨ？」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7429z/

俺日!季節の特別短編集！！

2012年1月13日16時54分発行